

# 聖徒の道

3  
1992



末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会



# 聖徒の道

1992年3月号



表紙——「人はそれぞれ、地上で果たす使命を持っているのです。」フランス・パリステキ部のセシル・ペルー姉妹はそう語る。彼女は、毎年3カ月間を、インドの貧しい人々のために費やしている。(本誌「セシル・ペルー インドでの愛と友情」p.8参照)

表紙撮影——ノーバート・メストラレー  
ティエ

裏表紙撮影——レオ・ジャール

こどものページ

撮影——ミカエル・ショーンフェルド

## 一般

扶助協会150年祭 大管長会からのあいさつ .....	1
大管長会メッセージ——「汝もし忠実にして」 第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー .....	2
セシル・ペルー インドでの愛と友情 ティエリー・クルーシー .....	8
天の窓 関八重子 .....	16
キリサンタ・ファン マービン・K・ガードナー .....	18
フィデンシア・ガルシア・デ・ロハス メキシコの教会に捧げた生涯 アグスティン・ロハス・サントス .....	22
母であることの喜び ベトリーア・ケリー .....	25
扶助協会150年祭 世界に広がる姉妹の輪 .....	34
霊的な活力の再生 シャーリーン・ミーク・サンダース .....	42

## 定期特別記事

家庭訪問メッセージ 扶助協会の設立 中央扶助協会会長会 .....	48
--------------------------------------	----

## こども

ウイルフォード・ウッドラフ ケリー・リックス .....	2
小さなお友だちへ——ジェームズ・M・パラモア長老 .....	4
マルコの決心 ポーラ・ハント .....	6
分かち合いの時間——船をつくったニーファイ バージニア・ピアス .....	9
まつのはいやよ ナンシー・アルバート .....	12
おもちゃばこ どうぶつあわせ .....	14
敬けんにできます、わたしの手 バーバラ・ジョーンズ .....	16

# 大管長会からの あいさつ

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン  
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、チャールズ・テイディエ、ロバート・E・ウエルズ  
編集長：レックス・D・ピネガー  
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン  
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌  
編集主幹：フライアン・K・ケリー  
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー  
編集副主幹：デビッド・ミッチェル  
編集補佐/こどものページ：ティエーン・ウオーカー

チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ  
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン  
デザイナー：シェリー・クック  
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・テイトン、ジェーン・アン・ケンブ、デニス・カービー

工程管理：ダイアナ・パンスタブレ  
配送部長：ジョイス・ハンセン  
聖徒の道 1992年3月号第38巻第3号  
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
〒106 東京都港区南麻布5-10-30  
電話 03-3440-2351  
印刷所 株式会社 精興社/クロスロード  
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)  
半年予約 1,100円(送料共)  
普通号 150円、大会号 350円

International Magazine March  
1992 ITEM 92983 300  
Printed in Tokyo, Japan.  
Copyright © 1992 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Translated into Japanese 1992.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito No Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

1992年に行なわれる扶助協会150年祭は、極めて重要な教会の行事です。1842年3月17日に扶助協会が組織されたとき、ジョセフ・スミスは次のように語りました。「……この協会は喜びに満ち、これから後、知識と英知がここから流れ出るであろう。これは貧しき者、困っている者たちにとって良き時代の始まりである。彼らは喜びに満たされ、あなた方の頭に祝福をもたらすであろう。」(「教会歴史」4：607)

教会の姉妹たちは扶助協会の慈善活動や教育活動を通じて、多くの人々に祝福を与えてきました。世界各地で教会に集う扶助協会の女性たちは「愛はいつまでも絶えることがない」というモットーを実践しています。この扶助協会創立150周年の記念行事を、人々への奉仕をもって祝おうとしている扶助協会の指導者たちを、私たちは称賛したいと思います。扶助協会の指導者たちが、この重要な活動を通して人々に手を差し伸べるとき、どうか彼女たちを励ましてください。

地上に神の王国を建設するため、極めて重要な貢献をしてくださっている教会の姉妹たちに感謝いたします。また、扶助協会という組織、その使命、そこに所属する姉妹たちが世にもたらす良き実を、私たちはうれしく思います。

この扶助協会150年祭を通じて、すべての教会員が強められ、祝福されるようにお祈りいたします。

エズラ・タフト・ベンソン  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン







# 「汝もし忠実にして」

第一副管長  
ゴードン・B・ヒンクレー

150年前、予言者ジョセフ・スミスはイリノイ州ノーヴーで扶助協会を組織し、初代会長には予言者の妻エマ・ヘイル・スミスが就任しました。

最近、私は教義と聖約第25章を読み直すようにという導きを受けました。ご存じのように、この章は、予言者ジョセフを通してエマに与えられた啓示です。教会設立後間もない1830年7月、ペンシルベニア州ハーモニーでこの啓示は与えられました。

先日、私はひとりの女性から失意に満ちた手紙を受け取りました。それには、「これまで何をしようとしても、ほとんどうまくいったためしがないと書かれていました。そして、彼女はこう問いかけていました。「神は私に何を期待しておられるのでしょうか。」

神がこの女性をはじめとするすべての女性に、そして実際にはあらゆる人々に、何を期待しておられるのか、その答えが、この美しい啓示の中で明らかにされています。この啓示の中に書かれている主のみ言葉を読み返しな

がら、教会の姉妹たちに対する私の考えを述べてみたいと思います。

主は、エマに向かい、そして私たち一人一人に向かい、次のように言われました。

(2節)

「わが意に就きて、今汝に一つの啓示を与う。汝もし忠実にしてわが前に徳の道を履まば、われ汝の生命を保ちシオンに於て一つのゆずりを与えん。」

「汝もし忠実にしてわが前に徳の道を履まば」とあります。この聖句をテーマに取り上げるだけでも随分長い話ができそうですが、今は簡単に触れるだけにしておきます。

エマは「選ばれし婦おんな」と呼ばれました。つまり、「主が選びたもう者」であったということです。教会の姉妹たち一人一人も「選ばれし婦」です。回復されたイエス・キリストの福音にあずかる者として、この世から選び出された人だからです。



広い意味で、私たちは各々、全能の神が与えてくださる祝福の鍵を握っている、と言うことができます。もし祝福が欲しければ、それに見合う代価を支払う必要があります。その代価のひとつは忠実であることです。何に対して忠実でなければならないのでしょうか。自分自身、すなわち自分の内に存在する最も優れたものに対して忠実でなければならないのです。いかなる女性といえども、自分を過小評価したり、自己を卑しめたり、自分の能力や才能を軽んじたりすることがあってはなりません。自分の内に秘められた、神から与えられている偉大な属性に忠実であっていただきたいのです。福音に忠実に、また教会に忠実に生活しましょう。私たちの周囲には、教会の評価を落とし、初期の指導者たちの弱点を捜し、教会のプログラムの粗捜しをし、教会を批判しようとする人がいます。私は心から証します。この業は神のみ業であり、それを批判する人は神を批判することになります。

神に忠実になってください。神こそ、皆さんの力の真の源であり、天の御父なのです。神は生きておられ、祈りを聞き、祈りにこたえてくださいます。その神に忠実になろうではありませんか。

続いて主はエマに、「わが前に徳の道を履まば」と言われました。

末日聖徒の女性なら、この言葉の意味はよく理解していることと思います。エマ・スミスに、ひいては私たち全員に与えられたこの聖句は、神の王国で受け継ぎを得たいと望む人が守るべき条件を教えているのではないのでしょうか。徳の欠如は、神の戒めに従順であることとはまったく相反することです。徳以上に麗しいものはありません。徳の力ほど偉大な力もありません。また、徳を備えた高潔さに匹敵するものもありません。そして、私たちにとって徳ほどふさわしい特質も、また魅力的な装いもほかには見当たらないのです。

興味深いことに、この啓示の中で主は条件付きの偉大な約束をエマに与えて、次のように言っておられます。「汝の罪赦されたれば、汝はわが召したる選ばれし婦なり。」(3節)私は、恵み深い御父から赦しの賜が与えられていることに心から感謝しています。主は、悔い改めて赦される人々について、予言者イザヤを通じて次のように言われました。「たといあなたがたの罪は緋のよう

であっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」(イザヤ1:18)

これまでの人生で重大な過ちを犯して嘆き悲しんでいる人がいるかもしれません。私はそのような人々に確信をもって申しあげます。古代と現代の啓示の中で約束されているとおり、悔い改めのあるところには赦しもあります。過去に犯した悲しい過ちにいつまでもとらわれていることはありません。それよりも、「神の命に従って生き」るのです。(アルマ37:47)

エマは「選ばれし婦」と呼ばれました。これは別の聖句を使って表現すれば、「主が選んだもう者」であったということです。(モロナイ7:31)皆さん一人一人が「選ばれし婦」です。回復されたイエス・キリストの福音にあずかる者として、この世の中から選り出された人だからです。皆さんが、自分の選り出されたことを確かめ、それにふさわしい生活をするならば、主は皆さんを誇りに思い、大いに高めてくださるでしょう。

主はさらにエマに向かい、こう言われました。「汝が見ざりし物に就きてはつぶやくことなかれ。」(4節)この「見ざりし物」とは、夫が翻訳していた金版のことで、当時エマは筆者として働いていましたが、ジョセフが金版を見せてくれないことに明らかに不満を抱いていました。そのため、主はエマにこう言われたのです。「つぶやいてはならない。不平を言ってはならない。私の永遠の知恵から出たことを受け入れ、不満を言ってはならない。」教会の中には、自分に神権が与えられないことに対して不満を持つ女性がわずかながら存在します。そのような女性には、主はこう言われるのではないのでしょうか。「汝が見ざりし物に就きてはつぶやくことなかれ。」

これは主のみ業です。金版を人に見せてはならないという規則を定めたのはジョセフではありません。ジョセフは、主からそう指示を受けたのです。同様に、だれに神権が授けられるのかということについても、その規則を定めたのは私たちではありません。このみ業を管理しておられる主が定められたのです。その定めを変えることができるお方は、主以外にはおられないのです。

この同じ啓示の中でエマは特別な召しを受けました。それは「汝の夫なるわが僕ジョセフ・スミス(二代目)を、苦難の時に慰めの言葉を以て優しき心にていたわる」





(5節)という召しです。

これは興味深い言葉です。エマはジョセフの妻であり、伴侶であり、苦難のときには支えでした。慰めの言葉をもってやさしい心でいたわることこそ、彼女の務めなのです。

この啓示は、妻であるすべての女性が家庭の中で語る言葉も、同じようにやさしいものでなければならない、というチャレンジではないでしょうか。いにしへの人は「柔かい答は憤りをとどめ」る(箴言15:1)と言っています。この啓示の中で、主がやさしい心で慰めの言葉を語るようにと言われたことに、私は特別の感慨を覚えています。

多くの家庭では、言い争いがよく見られます。争いは破壊的で、人の心をむしばんでいきます。争いは、結局のところ苦しみと心痛と涙を生むだけです。家庭の中に緊張や摩擦、苦難があるときには、やさしい心で慰めの言葉をもって語るのです。私たち一人一人にとって、なんとすばらしい勧告でしょうか。

エマはまた、ジョセフの手によってあんしゆ按手聖任(任命)され、「聖典をと書き明し、わが『みたま』によりて受くる

エマは、真理と義について教えるよう求められました。さらに福音を研究し、同時に、自分の人生の舞台であるこの世のことについても学んでいくよう求められたのです。この教えは、この教会の女性すべてに当てはまります。

所に従い教会員に熱心に説き勧〔める〕」(7節)ことになりました。

エマは教師となり、真理と義について教えるよう求められたのです。主はこの召しについてさらに次のように言われました。「汝は聖霊を受け、汝の時は記録することと教えるを多く学ぶこととに費さるべし。」(8節)

エマは福音を研究し、同時に、自分の人生の舞台であるこの世のことについても学んでいくよう求められたのです。そしてこの教えは、その後与えられた、すべての人に適用される数々の啓示の中でも明らかにされています。エマは「多く学ぶ」ために時間を費やし、自分の思いを記録にとどめるようにと言われたのです。

現代の女性の皆さんにも、私は、年齢にかかわらず、記録をつけるようお勧めしたいと思います。日記を書き、自分の思いを文書にして残していただきたいのです。物を書くことは厳しい訓練です。たゆまぬ努力を続けて初めて身につくものです。皆さんの経験や思い出を書き止めていけば、これから後、様々な面でそこから恩恵を受け、また皆さんの家族をはじめとする多くの人の人生に祝福をもたらすことになるでしょう。

この啓示の中でエマは、「『みたま』によりて受くる所に従い教会員に熱心に説き勧むべし」(7節)と命じられています。

エマをはじめこの教会のすべての女性には、なんと特別な責任が与えられていることでしょうか。学び、備え、思いを整理し、聖典を積み明かし、聖霊の導きのままに、善き業を行なうように説き勧める責任があるのです。

主はさらに続けてこう言われました。「またまことにわれ汝に告ぐ、汝はこの世の事をさしおきて、この世に勝る世の事を求めよ。」(10節)

ここでは、主がエマに、住む場所や食卓に載せる食べ物や衣服などに関心を持つてはならないと言われているわけではありません。現代でも多くの人がこうした物のとりこになっていますが、主が言わんとされたのは、こうした物に心を悩ませてはならないということです。むしろ、生命にかかわるもっと高い次元の問題、正義や善、人への愛や思いやり、永遠の事柄に、心を砕かなければならないと教えておられるのです。

エマは教会の賛美歌集を編集するよう命じられますが、この勧告が教会の設立後わずか3カ月で与えられたこと







エマは教会の賛美歌集を編集するよう命じられました。

賛美歌を歌うときには、

主が「心の歌は、われの喜びなり。

然り、義しき者の歌はわれに対する祈りなり。

彼らの頭に祝福を与えてその応えとなさん」

と言われたことを心に留めましょう。

は注目に値します。この召しに関連して、主は、現在私たちが頻繁に引用する有名な聖句を残されました。「すべて心の歌は、われの喜びなり。然り、義しき者の歌はわれに対する祈りなり。彼らの頭に祝福を与えてその応えとなさん。」(12節)

主はさらに続けてこう言われました。「この故に汝の心をはげまして喜び、汝のなしたる誓約を固く守るべし。」(13節)

主は私たち一人一人に、幸福な生活を送るようにとっておられるのではないのでしょうか。この福音は喜びのおとずれです。福音の教えがあればこそ、私たちは喜んでいられます。もちろん悲しいときもあるでしょう。心配し、不安に思うこともあるでしょう。心に悩みを持たない人はいません。しかし、主が「心をはげまして喜び」なさいと言われたのです。私たちがお会いした人々の中には、女性も含めて、決して太陽の光を見ることなく、ただひたすらに黒雲に覆われた嵐の中を歩み続けているのではないかと思われるような人も、数多くいました。幸福な態度をはぐくんでください。楽天的な心を養ってください。信仰をもって歩み、自然の美しさや、皆さんの愛する人々のやさしさに喜びを見いだし、神につける事柄について心に抱いている証を味わってください。

「たえず優しき心もち、たかぶりいましを警めよ。」(14節) これも同じ啓示の中で言われている言葉です。私たち一人一人にとっても実いましめに意味の深い言葉です。

「たえずわが誠命を守れ、さらば汝義の冠を受けん。」(15節) これはエマ・ヘイル・スミスに与えられた主の約束です。これはまた、皆さん一人一人に与えられた主の約束でもあります。幸福は戒めを守ることにかかっています。末日聖徒の女性にとって、こうした戒めを破ったときにもたらされるものは、悲嘆しかあり得ません。戒めを守る人には皆、冠が約束されています。神の娘に与えられる女王の冠、義と永遠の真理の冠が授けられるのです。

主はこの啓示の結びの言葉として、「これすなわち、すべての人に語るわが声なり」(16節)と言われました。したがって、このとき与えられた主の勧告は、私たちすべてに当てはまることとなります。

私は、162年前に与えられたこの偉大な啓示の言葉を、皆さん一人一人に託します。この啓示は、与えられた当

時と同じように、今でも時宜じぎにかなった勧告です。皆さんが、この啓示を読んで深く考えてくださるようお願いしています。

愛する姉妹の皆さんの上に神の祝福がありますように。私たちが称賛してやまないかわいい少女の皆さんにも、またすばらしい将来を夢見る美しい若い女性の皆さんにも、未婚でときどき孤独を感じてはいても、決して主から忘れられているわけではない皆さんにも、そして、子供を育てるという責任を担って努力している皆さんにも、夫を亡くし、あるいは離婚した皆さんにも、さらに私たちが心から愛し、敬い、誇りに思う美しい年配の女性の皆さんにも、神の祝福がありますように。神の娘として永遠の福音の光の祝福にあずかっている皆さんが、さらに神の祝福を受けて、正しい望みを抱き、心に平安を得て、喜びの日々を送ることができるようお祈りしています。□

#### ホームティーチャーへの提案

1. 主が1830年にエマ・スミスに与えられた勧告は、あらゆる姉妹たちに当てはまる。
2. いかなる女性といえども、自分を過小評価したり、自己を卑しめたり、自分の能力や才能を軽んじたりすることがあってはならない。自分の内に秘められた、神から与えられている偉大な属性に忠実でなければならない。
3. 教会の姉妹たちは皆「選ばれし婦」である。回復されたイエス・キリストの福音にあずかる者として、この世の中から選り出された人々である。姉妹たちが自分の選り確かなものとし、それにふさわしい生活をするならば、主はそのような人々を誇りに思い、大いに高めてくださる。
4. 主は、この教会のすべての女性に、特別な責任を与えられた。その責任とは、学び、備え、思いを整理し、聖典を積み明かし、聖霊の導きのままに、善き業を行うように説き勧めることである。
5. 幸福な態度をはぐくみ、楽天的な心を養うこと、また、信仰をもって歩み、自然の美しさや、愛する人々のやさしさに喜びを見いだし、神につける事柄について心に抱いている証を味わう必要がある。



# セシール・ペルー

## インドでの愛と友情

ティエリー・クルーシー

フランスのパリステーキ部、セルジー・ポントワーズ支部に所属するセシール・ペルー姉妹は、ディオール、カルダン、リッチなどといった、パリの一流ファッションデザイナーの会社で20年以上も働いています。そこで世界中の裕福な女性のための洋服をデザインし、作っているのです。

しかしこの上品で精力的な女性は、1986年からはその華やかな職業を、まったく違うある仕事をする手段として利用しています。彼女は毎年1年のうちの3カ月間を、インドの貧しい人々のために費やしています。貧しい子供たちを救うためにカルカッタ郊外の貧困地や、ベンガルにある施設で、親切な地元の人々と協力しながら働いているのです。そのためにフランスの友人たちからの寄付と個人の蓄えすべてを捧げています。

### 「することが山ほどあるのはわかっていました」

セシールが末日聖徒イエス・キリスト教会を知ったのは、1974年に旅行でアメリカ合衆国を訪れたときのことでした。たまたまtemplスクウェアに立ち寄り、タバナクル合唱団のコンサートに足を運んだのです。「非常に感動しました」と彼女は述べています。同行していた

旅行者たちに、合唱団のコンサートが今回の旅行で1番よかった、と後で話したほどです。

数カ月たって、フランスの自宅に宣教師が戸別訪問にやって来ました。セシールは初めは興味がありませんでしたが、ひとりの長老がソルトレークシティから来たことを伝えると、そこでの経験を思い出し、あの合唱団がある教会から来たのかと尋ねました。長老がそうだと答えると、セシールは宣教師たちを中に招き入れ、メッセージを聞いたのです。それから数カ月して、1975年にセシールはバプテスマを受けました。

11年後の1986年7月に、セシールは初めてインドを訪れました。「隣人に助けの手を差し伸べようという考えで、休暇を利用してカルカッタに出かけました。私が携えて行ったものといえば、応急手当ての免状とスーツケースいっぱい薬品、それに善意だけでした」と彼女は言います。インドの様子については、本で読んだり話を聞いたりしていたので、「することが山ほどあるのはわかっていました。」

そこで彼女が見つけた仕事は、カルカッタの老人や赤ん坊、障害のある子供たちを助けることでした。「一生懸命に、忙しく働く機会に恵まれました。貧困者のための施設で、洋服やシーツの煮沸と洗濯、食事の準備、病









飢えに苦しみ、病気がちであったダヤール・アーシュラム孤児院の子供たちは、ペルー姉妹の努力によって健康と生活が改善されている(左)。

生活物資の供給に加えて、彼女は自立の原則を教えた。現在、食事の列に並ぶ彼らには、野菜や魚、卵も与えられている(右)。

ペルー姉妹とアーシュラムの友達のミリー(右端)。

人に食物を与え、医療を施すなどです。死に瀕<sup>ひん</sup>している人には、体を洗って、安らかにこの世を去って行けるように、温かい愛情を注ぎました。おむつを替えたりミルクを与える必要のある赤ん坊たちは弱りきっていて、自分の健康を分けてあげたいと思うほどでした。」セシールは最初、「マザー・テレサ——神の愛の宣教者の会」の人たちと働き、後にはほかの団体にも交じって働きました。

「私は特別偉大な人間ではありません。インドでの私の経験は、愛と友情の表われなのです」とセシールは語っています。

### 「主があなたをお遣わしになったのです」

最初インドに滞在したときに、セシールは100人ほどの老人の住む施設を見つけました。そのほとんどは寝たきりでした。「その人たちの面倒を見ていたのは、カトリックの宣教師がたったふたりだけでした。しかもひとりには3日間も病気で苦しんでいたのです。私はもうひとりのボランティアと、到着するとすぐにそでをまくって仕事にとりかかりました。宣教師のシスター・テレシーナは私にキスをすると、こう言いました。「主があなたをお遣わしになったのです。」私はその言葉を信じました。」

その後、カルカッタ郊外のピルカーナという町に行ったセシールは、焼けつくような猛暑と、モンスーン季節に頻繁に発生する洪水の中、その地域の貧困の状態を目にしてまったくあぜんとしてしまいました。「それでもまだ十分希望がありました。子供たちが、世界中のほかの子供たちと同じように、笑ったりはしゃいだりしていたからです。」

そこでセシールは、ヨーロッパ出身の夫婦と知り合い

になりました。彼らは貧困に苦しむインドの人々の自立を助けようと、20年も働いてきたのです。「この夫婦は、専らインド人を対象とした福祉事業を始めたところで、私も幸いなことにその事業に参加することができました。私は、14歳から17歳の少女に、ろう染め作りを教える訓練センターを設立しました。彼女たちが将来それで家族を支えられるようにするためです。」

また、セシールはファッションデザインの経験を生かして、型紙作りや、洋服の裁断、縫製なども教えました。その女の子たちは今では、孤児院の子供たちのために服を作っています。

セシールはまた、貧しい人々のための食事の配給や無料の健康診断を始める手伝いもしました。「そこでは乏しい人が何も持たない人に分け与えています」とセシールは言います。

### バンブールの子供たち

セシールはそれから、アーシュラムと呼ばれる施設があるのを知りました。そこはヒンズー教の道場なのですが、孤児院のような役割を果たしているのです。それぞれのアーシュラムには、5歳から12歳まで約100人の子供たちがいます。そのほとんどが、病気や栄養失調により、あるいはトラに襲われたりして両親を失った子供たちです。子供たちは最初、飢えた状態でアーシュラムにやって来ます。そのうえ、多くは皮膚病や発熱、腸の病気が極端なビタミン不足によるくる病で苦しんでいます。明日もご飯が食べられるという感覚に慣れるまで、大抵3カ月かかります。現在ベンガルには8つのアーシュラムがあり、バンブールのジャングルの真ん中にあるダヤール・アーシュラム(幸福の家)もそのひとつです。

セシールはこう述べています。「私はこのアーシュラ





ムをととても愛しています。そこでインド人の心を見いだしたからです。くつろいだ気持ちになれるのです。私は子供たちに、遊びや歌、そして笑うことを教えました。また子供たちからは、床に寝たり、手をスプーンのように使って食べたり、家の中や神聖な場所で靴を脱いだりすること、そして生活に不可欠な愛という特質を重んじることを教えられました。」

セシールと子供たちの間には、すぐにきずなが生まれました。子供たちはセシールのことを、「セシール・デーディー」（セシール姉さん）と呼びます。また、セシールが初めての滞在でパラチフスにかかったとき、この小さなインド人の友達はまるで自分がお姉さんかお兄さんになったかのように看病し、病気のために起こるけいれんを和らげるために、足や腕をさすってくれました。

1986年にセシールがバニプールを初めて訪れる数カ月前のことでした。地元の福祉団体が養鶏場を作って120羽の鶏を飼育し、800人のアーシュラムの子供たちに、毎週1個の卵が与えられるようになりました。ジャングルで取れる植物の根や米しかなかった食生活の中で、卵は貴重なたんぱく源でした。しかし不幸にも、セシールが来るころには、鶏は次第に死んでしまっていました。

### 「一滴の水」

セシールは次のように語っています。「私はフランスに帰ったとき、もしもう一度バニプールに行ったら、養鶏場を作ろうと決心しました。それは子供たちにとって必要不可欠だったからです。インドの状態を見て私は深く心を動かされ、どうにかして実際に援助できるように、もう一度インドに戻らなければならないと思ったのです。」

セシールのパラチフスが完治するまで5カ月ほどかかりました。そして、「よくなったらすぐ仕事に戻り、お

金を蓄え始めました。しかし間もなく、自分のお金だけでは足りないことに気づいたのです。私は天父に助けを祈り求めました。すると、両親や友達、教会員にも自分の計画について話すべきだと感じました。自分の家でパーティーを開いたとき、前もって申し合わせたわけでもないのに、多くの人々が、食物や鶏、また子供たちの福祉のためにと、お金を入れた封筒を手渡してくれました。私は彼らの信頼と愛に深く心を動かされました。」

次に彼女は、ステーキ部長であるダニエル・ピーショー兄弟にその奉仕活動のことを話してみました。「彼はステーキ部の会員たちに、バニプールでの奉仕活動について手紙で知らせるように勧めてくれました。3日後、ステーキ部から小切手を受け取ったときは、とても感激しました。それはステーキ部の『一滴の水』キャンペーンによって集められたお金でした。世界の貧しい人々を助けようと、ステーキ部で断食して集められた献金だったのです。ステーキ部の指導者たちは、そのお金を養鶏場のために使おうと決めたのです。」

9月になってセシールはバニプールに戻りました。そこで120羽の成熟しためんどりと、5カ月ほどすると卵を産めるようになる120羽のひな鳥、養鶏場の建物を作るのに必要な資材、鶏の1年分のえさに充てる穀物、そして30羽の雌のアヒルを手に入れました。アヒルのふんは、近くの池の魚のえさになりました。また残りのお金でアーシュラムの赤ん坊たちのために6カ月分の粉ミルクを買いました。

セシールは、フランスの養鶏の専門家たちに、養鶏場をどう管理したらよいか尋ねました。彼らのアドバイスのおかげで、現在バニプールでは、かつてこの地域に見られなかったほど上質の鶏卵を産しています。

このような緊急救護の活動にあっても、セシールは自立することを人々に教えました。「今では子供たちが養







バニプールでの食事(左)には、子供たちの作った野菜が使われている。

夕食のカレーとご飯に加え、子供たちは毎週日曜日には卵をひとつずつもらえるようになった(右)。卵はパリス・ターキ部の教会員たちから寄付された資金で、セシール・ペルー姉妹が購入した鶏が産んだものである。彼女はアヒルや穀物、養鶏場の資材も購入した。



鶏場を管理する責任を負っています。自分で卵を集めて数えるのです。小さな子供に至るまで全員が仕事を分担しています。また彼らは互いに助け合う責任も学んでいます。アーシュラムでは管理する大人ふたりと、わずか3人の料理人がいるだけだからです。しかもその3人は障害を持ち、賄う子供たちは100人いるのですから。」

### 自立の始まり

初めての訪問以来、セシールは毎年2回バニプールを訪れています。彼女個人の貯金とパリやストラスプールにいる友人たちから集めるお金で、福祉活動を続けています。ひとりで働くときもあれば、セバ・サン・サシチのような地元の奉仕団体と共に活動することもあります。また南部の下層階級の人々を助けるためみずからバラモンの裕福な生活を絶ったソリ・クマール・ダ氏や、カトリック教会の神父で自分も貧民の中で生活しているガストン・グランジャン氏などのボランティアの人々と共に働くこともありました。それらの人々の行為のすべてが、とても役立っています。

セシールがバニプールを訪れる度に、進歩が見受けられます。荒地だった所もアーシュラムの野菜畑になっていました。最初は道具が何もなかったので、子供たちは棒を使って耕していましたが、今では鋤<sup>つまき</sup>やつるはしを使っています。近くの池に魚が何匹か放たれてから、今では養殖場と呼ぶにはまだ早いにしても、年間240キロ近くの魚を産するまでになりました。子供たちは定期的に野菜を食べ、ときどきは魚を食べることもできるようになりました。

村の人々が井戸を掘り、パリにあるワード部の青少年たちがお金を調達してポンプを買いました。その結果、人口1,500人余りのこの村に、新たな飲料水が供給され

ることになったのです。この村の診療所は、村人だけでなく村の外からの患者も受け入れています。水を求めて並ぶ人の列は短くなり、伝染病も防げるようになりました。

1986年に道路が開通してから、ソリ・クマール・ダ氏と村人たちによって建てられたベラーリの診療所では、毎月3,000人の患者を診ることができるようになりました。また栄養不良の赤ん坊25人を収容できる保育所も建てられました。母親は看護婦の検診を受け、子供のために週250グラムの粉ミルクを受けることができます。幼い命が救われているのです。

ベラーリでは、村人たちの手によって、学校も建てられました。男性も女性も子供たちも、建物の建築のためにれんが運びをしました。

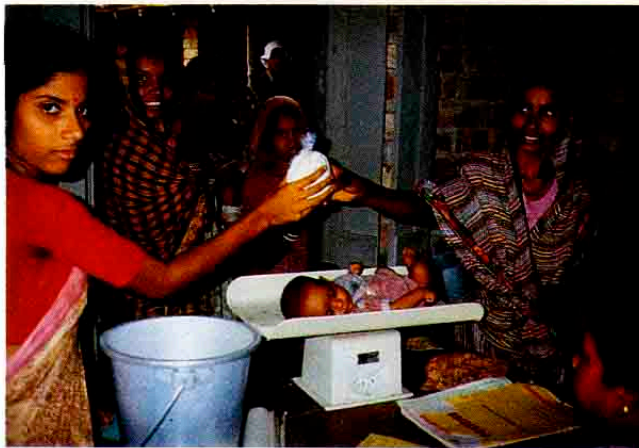
これらの事業や建築、教師や料理人にかかるすべての費用は、セシール・ペルー姉妹の集めた資金から賄われているのです。そのため、村人たちの中には、福祉活動に貢献する傍ら、みずから収入源を見いだす人もいました。

1988年11月に、特に貧しい35家族が選ばれて、家庭養鶏場の管理を学ぶことになりました。それぞれの家族はめんどりを2羽とおんどりを1羽ずつ受け取りました。彼らは鶏を食べてしまわずに辛抱強く育て、1年後には30羽以上にも増やして売り、米や薬、本、洋服などを買うことができました。こうして彼らの自立が始まったのです。

### ネパールのホームレスの子供たちを助ける

1989年に、セシールは友人であったフランソワ・ラボルド神父から、ネパールのネパールガンジに住む47人のホームレスの子供たちのために住居、医療施設、学校、





ベラーリの保育所では、母親が毎週健康診断を受け、赤ん坊のために250グラムの粉ミルクが与えられて、幼い命が救われている(左)。

また、バティックのクリスマスカードが2,000枚注文され、ピルカーナの訓練センターの女の子たちに報酬が与えられた(右)。

ペルー姉妹は、貧血と脱水症状を起こした子供を診療所に連れて来て、「どうか私の孫娘を助けてください」と嘆願した女性の顔が忘れられないと述べている(右端)。

そして農場を建てるための援助を依頼されました。その子供たちのうち21人は盲目だということでした。セシールは状況を把握するために、ベンガルからネパールに赴きました。それからパリに戻って必要な資金を調達しようとしたのですが、うまくいきませんでした。しかし、セシールが天父の恵みであると述べている、ある出来事によって、この事業は窮状を切り抜けることができました。

ある不動産業者が、パリ近郊の理想的な場所にあるセシールの家を、とても良い条件で買い取るということです。彼女は即座にその申し出を受け入れました。思い出の詰まった家は手放してしまいましたが、安い家を購入し、余ったお金をネパールでの事業資金にしました。1990年に住居と学校が建てられ、今は医療施設と農場のための資金の調達をしています。

セシールには多くの強い願いがあります。それは子供たちに十分な食べ物を与え、学校に行かせ、良質の飲み水を供給し、下水施設によって病気のまん延を防ぐことなどです。彼女は夢と希望にあふれているのです。少ないお金と人手によってここまでできるのなら、多くの援助があればどれほど大きなことが達成されるでしょうか。

### 霊を養う

セシール・ペルー姉妹の働きは、単に人々の物質的な福祉のためだけではありません。「十分な食料と衣類が手に入ると、人々は福音に対して反応を示し始めます」とペルー姉妹は述べています。彼女は今、ベンガル語を学び、教会について尋ねてきた人々に、ベンガル語で書かれたモルモン経の抜粋をプレゼントしています。

しかし、彼女の力強い教えは、専ら模範によって伝えられています。パリスターキ部の会員で、元地区代表のクリスチャン・アブラード兄弟はこう語っています。

「彼女は教会の福祉プログラムの原則に従っています。インドの法律に従うことにより、また地元インドの組織を通して働くことにより、彼女はすばらしい成果を上げています。そのことで、教会の評判もますます高まっているのです。」

セシールは、教会に属していないベンガル人の友人が、地元の役人に対し、彼女を弁護して次のように言ってくれたのを思い出しては深く感動しています。「この人は不正直なことは決してしません。モルモンなのですから。」

セシールは次のように証しています。「主はしばしば私のために扉を開いてくださいます。あるときはカルカッタで、税関の係員が、ほかのボランティアたちに許可する2倍の量の薬を持ち込むことを、許してくれました。またあるときは、満員の飛行機にひとつだけ残っていた席をぎりぎりで見ることができました。不親切そうな係員から、必要な許可を得られたことも何度もありました。主のみこころにかなうことである限り、自分で精一杯のことをすれば、主が助けてくださるのです。」

セシールはパリを出発してベンガルに戻る前には必ず、滞在中の導きとなる神権の祝福を受けるようにしています。

### 希望の光

もちろん、必要なことがあまりにも多いことをセシールはわかっています。現在の苦難を和らげ、もっと人道的な将来を可能にするためには、何百もの学校や、水をくみ上げるポンプ、養護施設、養鶏場、医療施設、トイレ、健康と公衆衛生を指導する人が必要です。しかし、彼女が何度も言うように、「成し遂げてきたことは少なくても、成果は大きい」のです。将来は明るく輝いて見





えます。希望の光が差し込み始めているのです。バニプールやペラーリの友人たちは、状況が変わり、慢性的な飢えと病気は根絶されるだろうと感じています。彼らは勇気を持って、自分の手でそれをしようとしているのです。

ステーキ部若い女性の会長として、またワード部初等協会や扶助協会の会長として奉仕してきたペルー姉妹の所属するステーキ部の会員たちは、だんだんこの事業に関与し始めています。1988年と1990年に、ステーキ部の会員たちは、ピルカーナの訓練センターにいる少女たちに、バティックと呼ばれるろう染め(さらさ)の技巧を生かしたクリスマスカードを注文し、その仕事に対して報酬を支払いました。セシールの友人の中には、ピルカーナで作られたすばらしいバティックのスカーフやハンカチ、壁掛けなどを買った人もいます。

パリステーキ部の初等協会の子供たちは、自分のおもちゃやゲームをベンガルの子供たちにプレゼントしています。また、パリステーキ部の青少年たちは、アーシュラムの子供たちと文通しています。

パリステーキ部のダニエル・ピーショーステーキ部長は、次のように述べています。「これは私たちの会員、特に青少年が学ぶ良い機会だと思っています。ペルー姉妹の努力のおかげで、子供たちや青少年たちは、自分の受けている祝福を顧み、小さな手段で大きなことを成し遂げられることをより深く理解する機会に恵まれているのです。」

インドから帰る度にセシールは、パリステーキ部やストラスプールの友人たちに、事業や資金の用途について報告します。それを聞くと、彼らは、地球上のはるか遠くの小さな地域の人々の生活の改善に自分たちが一役買っていることを知るのでした。セシールの語る言葉を聞き、子供たち(ミリー、ラノ、トゥール、シーマ、プーラ、

アウーティやほかの大勢の子供たち)と子供たちを託されている大人たち(スケージ、ショング、ルーシー、ミノーティなど)の写真を見ていると、漠然としていた救援事業が、<sup>あわ</sup>憐れみと兄弟愛を示すはっきりとした形で現われているのがわかります。

#### 「どうか私の孫娘を助けてください」

何がその働きの原動力になっているのかと尋ねられると、セシールはある女性の顔が忘れられないのだと言います。その人は、貧血と脱水症状を起こしている女の子を診療所に連れて来て、「どうか私の孫娘を助けてください」と嘆願したのだそうです。

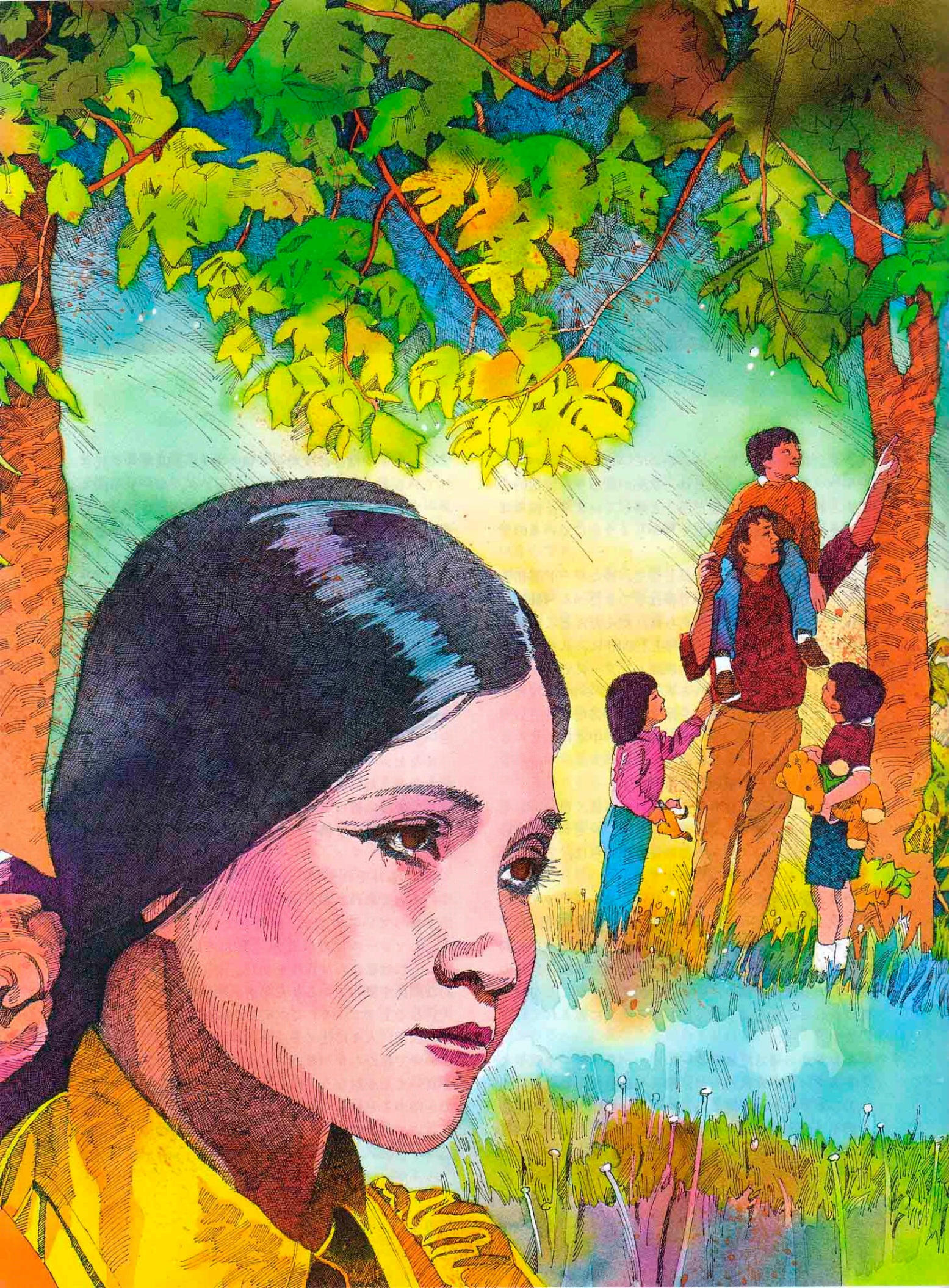
またセシールは、バニプールで若いヒンズー教徒の子供たちが、だれに言われたわけでもないのに、自分たちだけで敬虔に祈っている姿をしばしば目にしました。彼女はこの貧しい子供たちの霊的な豊かさに深く感動したのです。

「私たちはそれぞれ、近くにいる人であれ、遠く離れている人であれ、隣人に対する責任と、地上で果たす使命を持っているのです。無関心でいることはできません」とセシールは言います。「私たちは祝福されています。それは私たちが真理を知り、天父とすばらしい個人的な関係を築いているからです。それは私にとって最も大なる宝です。そして、そこから良き報いを得る最良の方法は、人々に仕えることです。奉仕は尽きることのない愛で私たちをつないでくれるからです。」

良いことを行なうのに、教会から具体的な指示が出るのを待つことはありません。自分を忘れて人々を助けるときに、想像を超えた祝福がもたらされるのです。」□

\*ティエリー・クルーシー兄弟——フランス、パリステーキ部トルシーワード部所属。教会の翻訳員。







# 天の窓

関 八重子

**私**たち家族が、北アルプスの山並みを一望できる公園で1日を過ごした時のことです。子供たちは歓声を上げて跳び回っています。4人目の子供がおなかにいた私は、いくらか疲れを感じ木陰に身を横たえました。そして、雲ひとつない真っ青な空を見上げながら、我が家の家計について思いをはせていました。すると、胸がいっぱいになり、涙があふれてきました。「主よ、什分の一は完全に納めております。いろいろな面で犠牲も払ってきました。一体いつ天の窓が開かれ、苦難が軽くなるのですか。」

心からそう祈りました。ふと目を転じると、夫と子供たちが笑い声を上げながら遊び回っています。その光景は私の目にとても平和で美しく映りました。突然、あふれんばかりの祝福は、今まさに目の前にあり、この家族こそが天父が与えてくださる最もすばらしい祝福なのだ、みたまがささやきました。

17歳で教会員となってからの私の最大の望みは、愛に満ちた家庭を持つことでした。ずっと望んできたやさしい夫と愛に満ちた家庭を、今私は与えられているのです。私はこの大なる宝を与えてくださった神への感謝の気持ちを決して忘れないようにしようと思います。

スペンサー・W・キンボール大管長は次のように言われました。「家庭そして家族は、私たちのよって立つ基盤である。……互いに愛し合い頼り合う親子……こそ、主が私たちのために計画された生き方である。」(『家族に流れる海流』「大会報告1973—75年」p. 308)この言葉を心に刻み込んで、永遠に通じる道を家族と共に歩いていきたいと思っています。

「お母さん、泣いてるの。」よく3歳の息子が聞いてきます。私は子供を抱きしめてこう言うのです。「そうよ。こんなにすてきな家族がいて、うれしくて涙が出ちゃうの。神様にありがとうって言おうね。」□



キリサンタ・ファン



## マービン・K・ガードナー

**キ**リサンタ・ファンは、家族やフィリピンの故郷マヤントックを離れて働く気持ちなど、まったくありませんでした。しかし、数人の友人はサウジアラビアに行って子供を世話する仕事に応募していました。友達は、もしその仕事に採用されると、多額のお金が手に入り、家に送金することができると言いました。当時25歳のキリサンタは雇われないだろうと思いつながら応募しました。ところが、1カ月後、サウジアラビアの王子が彼女を採用したという通知を受け取ったのです。

王子の秘書が彼女のところにやって来たときも、キリサンタはサウジアラビアに行きたくありませんでした。その秘書には彼女がなぜためらっているのか理解できませんでした。

「王家で働くことは特権ですよ」と彼は言いました。

「私はフィリピンで幸せですから、行きたくありません」と彼女は答えました。

「なぜですか。あなたはここで何をして働いているのですか。」

「工場で働いています。でも、それで幸せです。」

「もっと高い給料が欲しくないの

**家から離れるにつれ、  
キリサンタの不安は募りました。**

**「王子の下で働くというのに、  
見ず知らずのフィリピン人の女性を  
雇うなんて信じられないわ。」**

すか。」

「はい。これ以上のお金は要りません。私は幸せですから。」

秘書は王子がキリサンタを選び、ほかにはだれも採用されなかったことを強調しました。そして、彼女のパスポートもすでに用意してありました。キリサンタは非常に重荷に感じながらも、ついにサウジアラビアへ行くことに同意し、間もなく機上の人となりました。

しかし、家から遠ざかるにつれ、キリサンタの不安は募り、これは悪い冗談ではないかとも思いました。「王子の下で働くというのに、見ず知らずのフィリピン人の女性を雇うなんて信じられないわ」と思ったのです。

宮殿のような王子の邸宅に連れて行かれて、キリサンタは非常に驚きました。そのような富豪ぶりを考えたこともなかったのです。そこで王子の妻のひとりである美しい19歳の王女と2歳の娘に会いました。その娘を世話することになっていたのです。

その子供はアラビア語しか話せませんでした。「どうやってあなたの娘と話したらよいのですか。私はアラビア語は話せません。」キリサンタは英語で王女に尋ねました。

王女の返事は「それでは勉強してください」でした。キリサンタは大学を卒業していましたが、教師に付いてアラビア語を一から勉強し始めました。キリサンタは3カ月でアラビア語を上手に話せるようになり、王子から、娘にアラビア語と英語を教えるよう依頼されました。娘の養育だけでなく教師

としても働くことで、キリサンタの給料は上がりました。

キリサンタが新しい生活になじむのにそう長くはかかりませんでした。「私は王女になった気分でした。王子の子供を教え、世話をする以外のこと、つまり洗濯、アイロンかけ、料理などは一切する必要がなかったのです」と彼女は言っています。運転手付きの豪華な車もあてがわれました。ぜいたくな料理を食べ、王子と妻たち、子供たち、ほかの世話係たちと長いテーブルを囲むこともよくありました。王子の娘の勉強の進み具合や成長について、王子とはほとんど毎日のように話しました。

キリサンタは高い給料をもらい、フィリピンの家族に送金しました。つましい生活をしてきた家族の生活は豊かになり、キリサンタは自分のためにお金を使うことも覚えました。新しいドレス、高価な宝石といったぜいたくな物を手に入れるようになったのです。「欲しい物は何でも買いましたが、安物には見向きもしませんでした」とキリサンタは言っています。

3年後、キリサンタは1カ月間の休暇を取ってフィリピンに帰りました。両親とふたりの妹が教会に改宗したことを知ったのはその時です。そしてキリサンタも宣教師の話聞くことに同意しました。しかし、4回レッスンを受けた後で、もうこれ以上話を聞くつもりはないと断りました。何の興味も感じられなかったからです。「ぜいたくな生活のために私は霊的な生活の



必要性を感じなかったのでしょうか」と彼女は言います。しかし、ある理由でモルモン経と教会のパンフレットをサウジアラビアに持って行くことにしました。

キリサンタがサウジアラビアに再入国しようとした時のことです。空港職員が彼女のバッグの中にモルモン経を見つけ、その本を国内に持ち込むのは違法であると言いました。「私はパスポートに付いている手紙を見せました。その手紙には私が望む物は何も持って帰ることができる」と書いてあったのです。」職員が王子に電話をしたところ、王子はキリサンタと話すことを望みました。

「その本はあなたにとって本当に大切な物なのですか」と王子は尋ねました。キリサンタが「そのとおりです」と答えると、王子は許可を与えました。

その夜キリサンタはモルモン経を読み始め、宣教師がいくつかの節に印をつけてくれていたのに気づきました。特に、モロナイ書第10章4節と5節に心が引かれました。「ようやく興味がわいてきました。そして今まで読んだことを理解するには神様に尋ねなければならぬことを知り、私は祈りました。その本を読むべきであると毎朝感じ、毎日読む時間を作りました。そしてモルモン経を読むことで自分の霊が高められていることがはっきりわかったのです。自分が神様により近づき、生活に変化が起きていることが。」

キリサンタは高鳴る思いで、家に手紙を送り、自分の証が強くなっていると告げました。キリサンタの家族は、自分たちの家庭の夕べの様子や、賛美歌と家族一人一人の証を録音して送ってくれました。キリサンタは両親の証に特に感動しました。「父と母の証は私の霊を高めてくれました。私は涙が

止まりませんでした」と彼女は言っています。

福音についてもっと知りたくなり、1年もしないうちに再び帰国したくなりました。しかし、王女はキリサンタが休暇を取ったばかりであり、さらに3年間はサウジアラビアに滞在する約束であることを持ち出して、願いを聞き入れてくれませんでした。

「そこで、今度は帰国の許可を出してくれるよう、王子に泣いて頼みました。王子はついに、1週間以内に戻ることを条件に、帰国を許してくれました。約束どおりに戻るというしるしに着替えを4着だけ持ち、サウジアラビアで手に入れたほかの新しい服と持ち物はすべて置いていかなければならませんでした。」

フィリピンに戻ったキリサンタは再び宣教師と会い、次のように言いました。「以前は興味が持てませんでした。モルモン経を読んで、自分が変わったことに気がつきました。」

2回目に宣教師に会ったとき、キリサンタは祈るように言われました。「私は心に温かいものを感じ、涙が出てしばらくは祈りを続けることができず、涙が止まりませんでした。私は自分のすべての罪を痛切に感じ、モルモン経を読んで以来知った幸せな気持ちを改めて理解したのです。自分は本当に天父の娘であり、天父にとって重要な存在なのだ」と強く感じました。そして祈りの後、すぐにバプテスマを受けたいと宣教師に申し出ました。」

「いいえ姉妹、もう少しレッスンを続けましょう。」宣教師は答えました。それから数日後の1988年4月9日、キリサンタはバプテスマを受けました。

そのときからキリサンタはサウジアラビアでのぜいたくな生活に興味を失ってしまいました。「私はフィリピン

で何かをしなければならないと感じました。ここにいるにつれて、ますます幸せな気持ちが増すのです。現世だけでなく来世での生活の大切さを知ったからでしょう。家族が大切であることもわかりました。すべてに神様のことを優先し、神様に仕えなければならないことも。」彼女は言っています。

「もうひとつわかったことは、いくらお金があっても幸せにはなれないということです。サウジアラビアで私はあらゆるぜいたくを味わいました。教会に改宗してから、そういったことには価値がないとわかったのです。それらは私にとって無に等しいものでした。教会で行なうすべてのことは私が持っていたどんな物にも勝る喜びを与えてくれます。ですから私はそういった物を犠牲にしなければならなかったのです。」

2、3日後、王子がサウジアラビアから電話をしてきました。子供がキリサンタを待っているのですぐ戻ってほしいというのです。

「休暇を延ばしていただきたいのですが」とキリサンタは王子に言いました。

「私たちは君に戻ってほしい。子供も君に戻って来てもらいたがっている」と王子は言いました。

「私もご息女に会えなくて寂しいですし、仕事も欲しいのですが、ここフィリピンでなすべき仕事があるように感じるのです」と彼女は言いました。

「何の仕事ですか。」王子は尋ねました。

キリサンタは教会の宣教師として奉仕したいので2年間はサウジアラビアに戻れないと話しました。王子は彼女の思いが真剣なのを知って、彼女との契約を解除しました。「もし2年後にあなたが望むならば、サウジアラビアに戻って来てもいいが、王女はそれまで待てないだろう」と王子は言いました。





専任宣教師になる準備をしている間、  
キリサンタ(右から3番目)は  
ステーキ部宣教師として働いた。  
宣教師の「準備の日」に  
ほかのステーキ部宣教師や  
専任宣教師と昼食を取るキリサンタ。

1カ月後、キリサンタは王子が別の養育係を雇ったという手紙を受け取りました。キリサンタはその人と数回文通し、王子の娘について情報を交換しました。「幼い王女は、いつ私が戻ってくるかいつも聞いてくるんですよ」とキリサンタは言っています。

フィリピンでキリサンタは初等協会の教師や会長として、またステーキ部宣教師として召しを果たしました。そして、伝道資金を得るために銀行で働きました。「前に私が使ってしまったお金を取り戻すことができればいいのですが。実に多くのお金を持っていたのに。私はどうかしていました。本当に常識を無くしていたのです。」

バプテスマを受けてちょうど1年後、キリサンタはマニラ神殿でエンダウメントを受けました。その2カ月後の1990年6月に宣教師の召しを受け、母国フィリピンで伝道しています。

人々は彼女がなぜ伝道のために多くのことを犠牲にするのかと尋ねます。「この方が以前よりずっと幸せだからです」と彼女は答えています。

「伝道ってそんなにいいものですか。」

「はい、とても素晴らしいことです。」

伝道後はどうするつもりなのでしょうか。

「私は天父がお命じになる所ならどこへでも行きたいと思っています。もし再びサウジアラビアに行く道が与えられるなら、それが天父の望まれていることなのです。」

しかし、彼女にもどうなるかわかりません。「私は以前にはあらゆる贅を尽くした生活をしていました。私がお金をたくさん持っていた時は、神様のことを知りませんでした。イエス・キリストのことも知りませんでした。私の望みは、欲しいものをすべて手に入れることでした。でもそういったものは重要ではありません。もっと大切な価値のあるものに気づいたのです。」

今私は簡素な生活を望んでいます。そして天父に仕えたいと思っています。天父に愛されたいですし、天父をもっと愛したいのです。」□



フィデンスシア・ガルシア・デ・ロハス

# メキシコの教会に 捧げた生涯

アーグスティン・ロハス・サントス



1989年6月25日、メキシコシティーから約50キロ南方にあるテカルコにステーキ部が組織されるに当たり、2,500人以上のメキシコの聖徒が集まりました。メキシコにおける100番目のステーキ部でした。この新しいステーキ部の教会員の中には、メキシコで最高齢の末日聖徒である106歳のフィデンスシア・ガルシア・デ・ロハス姉妹がいました。フィデンスシア姉妹の88年間の信仰生活の間に、メキシコにおける教会はまたひとつ、歴史的に重要な時点を通じたのです。

それから1カ月半後にフィデンスシア姉妹は亡くなりました。テカルコステーキ部のフェルペ・ヘルナンデス・ルイスステーキ部長は次のように述べました。「姉妹の葬儀に参列し、私たちはメキシコの教会の先駆者である方の死という、歴史の1ページが閉じられる瞬間を目の当たりにしているのです。」

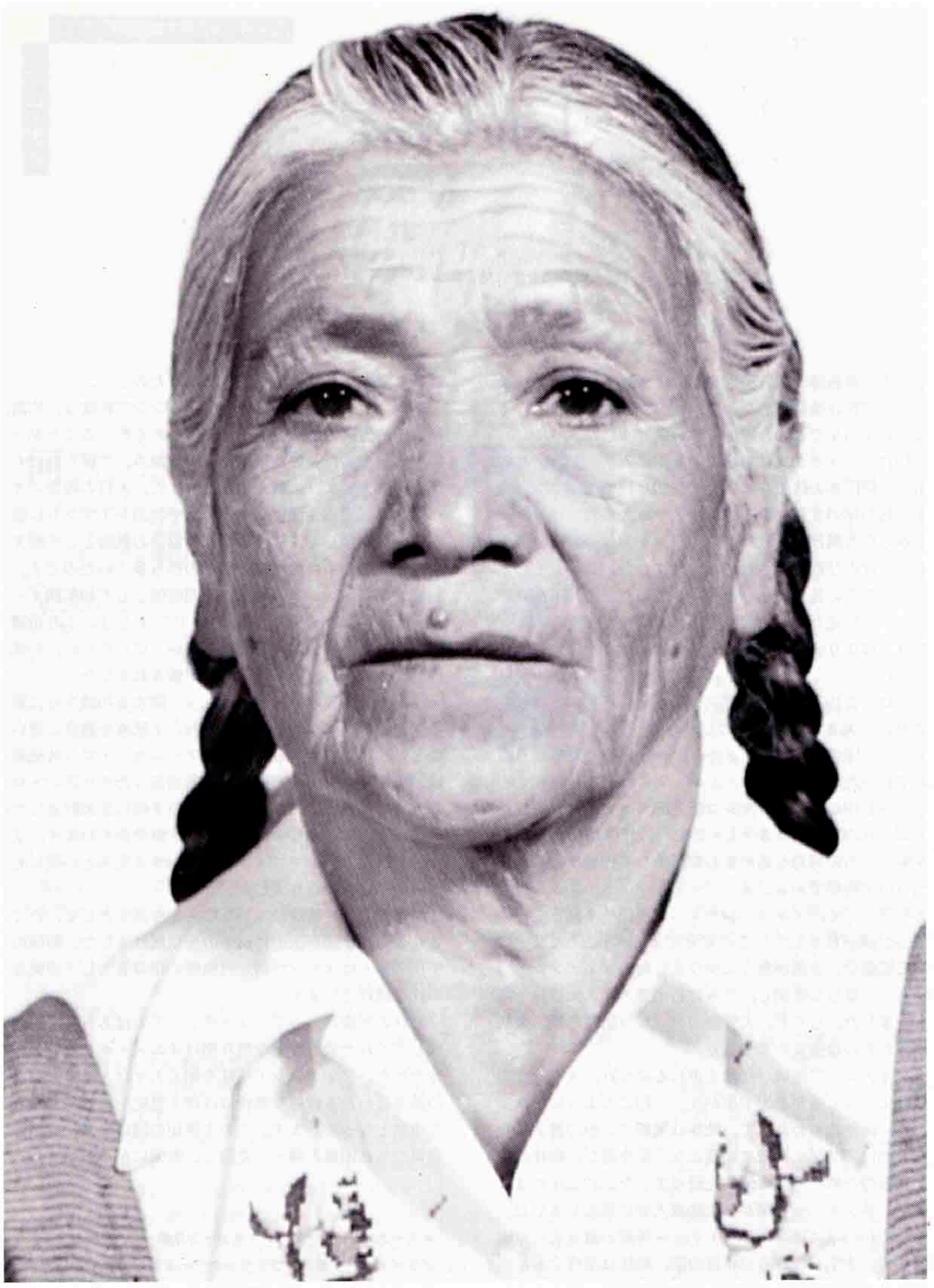
フィデンスシア姉妹は1889年から1901年ごろに末日聖徒イエス・キリスト教会に集うようになりました。この期間に教会はメキシコ伝道部を閉鎖したため、メキシコの教会の指導者たちは教会本部からの指示をほとんど受けることができなくなり、結果として多くの支部が教会の標準的な教義やその実践から逸脱してしまったのです。こうした時期にフィデンスシア姉妹と当時はまだ教会員で

はなかった彼女の家族はテカルコ支部に集うようになりました。

伝道再開後、1901年にアンモン・M・テニー長老が支部再建のためにテカルコに到着したとき、支部の指導者であったフリアン・ロハス兄弟は、初め指導権を渡すのに難色を示しましたが、最後には従いました。そして、8月18日にはテニー長老の手により、ロハス兄弟をはじめとする75人に改めてバプテスマが施されました。1カ月後、テニー長老はフィデンスシアと彼女の両親、祖父母にバプテスマを施しました。その日以来、彼女はその生涯を主に捧げてきたのです。

テカルコ支部が教会本部と連絡を取れるようになってからたくさんの方が教会に加わるようになった、とフィデンスシア姉妹は当時を回想していました。やがて最初の専任宣教師が赴任してくると、フィデンスシア姉妹と両親は宣教師が住めるように、部屋をひとつ増築しました。教会員が増えてくると、フィデンスシア姉妹は教会員や宣教師と一緒に、教会堂の建設用地を購入するために熱心に働きました。姉妹はまた近くのオスンバで伝道する宣教師たちに部屋や衣類、食物などを提供しました。姉妹自身もメキシコの伝道本部で働きました。

伝道本部で働いていたとき、フィデンスシア姉妹はアメ





リカ人の宣教師から賛美歌を英語とスペイン語で学びました。姉妹は後に有名なテカルコ合唱団に加わり、亡くなる数年前までこの合唱団で歌い続けました。

1910年、メキシコは革命の動乱期に入りました。その革命は何回かの休戦をはさんで1930年代まで続いたのです。1913年の8月になると、アメリカ人宣教師はメキシコから引き揚げなければならず、メキシコの教会の指導者たちは再び取り残されてしまいました。しかしそのころには教会の基盤がしっかりできていたため、革命はメキシコの聖徒たちが教会を管理していくうえでの大きな妨げとはなりません。この状態は4年以上続きました。

とはいえ1936年、フィデンシア姉妹はメキシコの教会における大きな分裂を目にしました。「第三協議会」と名乗る一団の教会員が、メキシコの末日聖徒たちから離れていったのです。

しかし1942年に、メキシコ伝道部長として召しを受けただばかりのアーウェル・L・ピアース兄弟が両者の誤解を解くための努力を始めました。そして1946年には、8代目の大管長であるジョージ・アルバート・スミス長老の管理の下で、メキシコシティで再統一を図るための集会が開かれました。この集会によって1,200人以上の第三協議会の会員が教会に戻りました。フィデンシア姉妹もこの集会に参加し、さらに自宅でスミス大管長と話もしました。しかも、大管長のテカルコ訪問の際、最初に訪れたのは彼女の家でした。

フィデンシア姉妹が年齢を重ねるにつれ、メキシコの教会にとって重要な出来事が次々と起こるようになりました。何年にもわたって、姉妹は家族やほかの教会員たちと共にアリゾナ神殿に幾度となく足を運び、姉妹自身と家族のために神殿の儀式を受けました。1972年には、メキシコシティで開かれた地域大会に参加しました。そして1983年にはメキシコシティ神殿の献堂式にも出席しています。これらの年月の間、姉妹は家庭でも、伝道活動や教会の責任の面でも献身的に働き、次のふたつ

は特に重大な意味を持つようになったのです。

初等協会の教師をしていたフィデンシア姉妹は、物語、特に旧約聖書の物語を通して子供たちを教えることがとても好きでした。彼女は毎日聖典を読み、生徒たちにも聖典を愛するように教えました。また、末日の教会のすべての予言者の生涯に関する史実や物語を子供たちに語って聞かせました。こうして初等協会の教師として教えた子供たちの中には、自分自身の孫も多くいたのです。

またフィデンシア姉妹は、訪問教師として40年間ずっと100パーセント訪問しました。1978年2月、この功績に対して扶助協会および伝道主任から賞が贈られ、姉妹の奉仕と慈善に対して感謝の意が表されました。


フィデンシア姉妹の子孫はもっと偉大な功績を心に留めています。すなわち5世代にわたる家族を教会に導いたということです。最初の夫のアーニセト・ロハス兄弟は、テカルコ支部の初期の指導者であったフリアン・ロハス兄弟の息子で、ふたりは6人の子供に恵まれました。そのうちのふたりは今も健在で、子供や孫もいます。また、2番目の夫のマニュエル・ローサス兄弟との間にも3人の子供を授かりました。

フィデンシア姉妹はふたりの夫より長生きして、たくさんの孫やひ孫が伝道に出るのを見届けました。姉妹の子孫の多くはメキシコの末日聖徒の指導者として忠実な奉仕を続けています。

姉妹の家族にとって「フィデンシアおばあちゃん」が残してくれた最も貴重な贈り物はイエス・キリストの福音でした。フィデンシア姉妹を知る人々にとっても彼女の長年にわたる謙遜な奉仕はほぼ1世紀をかけて築かれた遺産となっています。この1世紀の間にメキシコの教会員たちは困難と闘って克服し、繁栄に至ったのです。

□

\*アーグスティン・ロハス・サントス兄弟——メキシコ、イスタパラバステキ部クオウテモックワード部副監督。フィデンシア・ガルシア・デ・ロハス姉妹のひ孫に当たる。



# 母であることの 喜び

ペトリーア・ケリー

**光** あふれる空に気高くも美しい平和な天体が輝いて  
います。遠くその下では、やみに包まれた荒野に、  
その輝きに満ちた天体からやって来た移住者たちが小さ  
な岩とりでにひっそりと肩を寄せ合っています。彼らの住み家  
であるこの基地は、美しい故郷の栄光をいくらか残して  
はいるものの、暗やみに囲まれ、絶えることのない攻撃  
にさらされ続けているのです。

今や夜は明けて、基地ではひとりの女性が眠りから覚  
め、ひざまずいて上空の天体と住み家との交信を始めま  
す。このコミュニケーションは彼女に光と強さを与え、  
彼女の心を平安で満たし、しかも光は満ちて彼女の内か  
らあふれ出します。荒野のやみは光に追われて基地から  
後退し、彼女は聖なる故郷からの導きを求めて聖きよき書物  
を読み始めます。

赤ん坊の泣き声が聞こえ、彼女は本を閉じて席を立ち  
ます。子供の声が彼女の思いの中に入り込みます。おむ



つ、朝食、片方しかない靴下、弁当。「遅刻しちゃうよ。早く子供たちを家族の祈りに呼んで。」「あの子はどうしていつも遅れるんだい。皆待ってるじゃないか。」「プレゼントがお祈りのとき目を開けてたよ。」「どうしてそれがわかるの。自分だって目を開けてのぞいたんじゃない。」天空からの光線は輝きを失い始め、荒野のやみは再び小さな基地に忍び寄ってきます。やみが真っ黒なつたのようにドアに絡みついて、入り込んできます。まるでどんな小さなすき間も探し出して試すかのように。

汚れた皿の山、高く積まれた洗濯物、たまった繕い物、食糧の入った瓶、缶詰、なべ。電気器具のうなり声とぐつぐつというなべの音。子供たちの遊ぶ声に赤ん坊の泣き声。そしてテレビ。番組は騒がしい笑い声やコメディであふれています。貞潔は笑いものにされ、姦淫は珍らしくもありません。叫び声、銃声、暴力、嬌声、華やかな衣服、豪華な家、悪知恵の働く子供たち、苦悩する家族、飲酒、絶え間ない笑い声、ナイフ、銃、流血。黒いつたはテレビのアンテナに幾重にも巻きついていきます。

彼女は退屈した子供たちを周りに集めて教え、本を読み聞かせ、抱き寄せてキスをします。子供たちの昼寝の間、彼女は本を手に取ります。「親には子供に自分の考えを押しつける権利はない。」「決して子供に否定する言葉を言うてはならない。」「子供を罰してはならない。」「子供の失敗は親の責任である。」

彼女は別な本を手にして、<sup>あ</sup>またも近寄ってきたやみを押し戻します。「子をその行くべき道に従って教えよ」(箴言22:6)、「また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず」(教義と聖約68:28)、「お前たちは自分の子供らに……互いに愛し互いに助けねばならぬ事とを教えるであろう。」(モーサヤ4:15)

「ああ、ジョニーったら、また壁に落書きしているの？」

家族が荒野の旅から次々に帰還してきますが、何人かは外のやみをまだ引きずっているようです。「でもみんなやってるよ。」「私は頭が悪いからこんな算数はできないわ。」

「悪いけどお手伝いはできないよ。宿題が山ほどあるんだ。」両親は懸命にやみを払いのけ、家族が光へ戻れるように助けようとします。そこに友人からの電話。「あなたを見てるとね、自分が何か悪いことしているような気になるのよ。益にもならないことになぜそんなに一生懸命になるの。完璧主義？」

夜が近づくに従ってやみも深まります。「さあ急いで、急いで。おしゃべりする時間はありませんよ。」「しなければならぬことばかりで、時間が足りないわ。」「もっとお金があったら……必要な物がたくさんあるのに。」彼女は家の中を歩き回って影ややみのつたを見つけてそれを外に押し出し、二度と入り込まないようにドアと窓に鍵をかけます。光が入れるようにし、防御を固め、翌日の戦いに備えて十分武装しておかねばならないからです。「聖書の物語を読みましょう。」「きょう、うれしかったことを話してちょうだい。」「ジョニーと仲良くできるように、明日何ができると思う？」「家族の祈りの時間よ。」「君のお祈りを聞いてもいいかい。」「あなたの仕度ができたら、寝かせに来てあげますよ。」「もちろんお話を書く時間はあるわよ。」

夜のやみの中、彼女と夫は外を眺め、荒野がほんの数ミリ前日より遠のいたことに気づきます。彼らは再び共にひざまずき、彼ら自身がその創造の一端を担った美しい天国のひとかけらをかいま見て、その栄光のすばらしさに目を見張るのです。

これはSF小説でしょうか。必ずしもそうとは言えません。なぜなら、実際この地上には神の王国の基地があちこちにあり、そこでは男も女も神と共に創造の業に携わっているのです。それは単に子供の誕生で終わるような創造ではなく、結婚の誓約に始まり、永遠に続く日の光栄の家庭を築くという現在進行形の創造なのです。

### 日の光栄の王国に入るための訓練の場

家庭を築いてその機能を発揮させるために私たちに与えられている自由と責任は、世のどの職業よりも大きい





と言えます。ほかの職業では、上役や株主、消費者、市場の動向などに制限されて、言わば地上に縛りつけられている状態なのに対し、私たちの務めは天国の仕事、日の光栄のビジネスですから、天高く舞い上がることができるのです。夫および主と共に手を携えて築く家庭は、日の光栄の王国の訓練の場とも言えます。

ジョセフ・スミスは、福音が回復されたのは、福千年におけるキリストの統治に民を備えるためであると言っています。（「教会歴史」4：537参照）確かに私たちにはジョセフ・スミスが述べた、備えられた民になる可能性はあります。しかし、週3、4時間教会に通うだけでは救い主と共に住むにふさわしい民となることはできません。救い主と共に住むにはどうすればよいかを学ぶ場は、家庭です。家庭の中で、永遠の律法に従って生きることを学ぶのです。もし私たちが混乱と口論、不敬に満ちた星の栄の家庭に満足しているならば、学べるのは星の栄の律法だけであって、より高い律法に従えるようになることは決してありません。

この世で、特に現代では、日の光栄の家庭を実現させるのは容易ではありません。まず目標を明確に知ることが大切であり、その達成のためには、たゆまぬ努力が必要です。たとえ子供が病気でも、トイレの調子が悪くても、そして空がどんよりと曇り、夕食の野菜が焦げていてもです。そんな日には、目を天に据えて、私たちの目標は日の光栄の家庭であり、混乱とやみの勢力が結集して戦いを挑んできても負けることはない、ということを中心に留めなければなりません。私たち自身の最善の努力と主の祝福をもってすれば、失敗するはずがないのです。

日々の生活の中でときには失望感に打ちひしがれることもあるでしょう。そんなときに備えるためにこそ、永遠の視点を忘れずにいなければなりません。まず、大まかな目標を立ててみましょう。「天国のような家庭を作

ることによって家族の一人一人が天父とキリストと共に住めるよう教える」という目標はどうでしょう。それからこの大きな目標を小さく、さらに細かく分割して私たちの夢と日々の生活が調和のとれたものとなるようにしていきます。

このように永遠の視点に立つと、優先順位は自然にはっきりするはずです。そうすれば、家族と個人の祈りが1日の中で最優先されるべきこと、家族で聖典を読むことは朝食よ

りも大切で、子供たちに歯みがきを教えるよりも、戒めを守ることを教える方が重要なことだとわかるはずです。また家庭の夕べは、義務ではなく、喜ぶべき価値あるものと見なされるでしょうし、教会でのレッスンを補い、子供たちがより良く生きる助けとなるものとして、努力して取り組むようになるのではないのでしょうか。どんなささいな経験も、私たちの呼吸の一つ一つでさえも、日の光栄の家庭という布を織る糸となり得るのです。

聖い家庭を維持していくためには、まず私たち自身が思いや肉体と霊を最良の状態にしておくことが肝要です。そのために、どのような日常の活動が大切かも自然にわかるはずです。この世的な事柄より、適切な食事と運動、祈り、聖典の研究、神殿参入、それに才能を伸ばすことを、優先しなければなりません。いったん主の導きによって目標を設定したら、日常の様々な事柄を分析し、どれを行ない、どれを退け、また先送りするかを容易に決断できるようになります。もし私たちが主と一致しているならば、主は靈感により問題の解決法を思い浮かせ、私たちがまだ気づいていない危険から救ってくださるので。

## 秩序の家

日の光栄の家庭は、住んでいる家の大きさも様々で、

経済的に恵まれていることもそうでないこともあります。家族は夫婦だけの場合、あるいは大家族の場合もあるでしょう。家の中はひっそりとしているかもしれないし、にぎやかかもしれません。しかしながら、日の光栄の家庭には共通の特徴があるのです。それは主の地上での宮居である神殿と同じものです。

「汝ら組織して必要なる物をことごとく調べよ。而して、祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家なる一つの家を建つべし。」(教義と聖約88：119)

これが私たちの個々の家庭の評価の基準なのです。この基準に達していなければ、神の王国の基地とは言えませんし、そのためにどの点を改善すべきか一目りょうぜんのはずです。

### 家庭を築き、家族を育てる

夫と私は最近、日の光栄の家族作りに似た経験をしました。自力で家を建てたのです。

若くてまだお互いを知り合ってもいなかったころから、私たちはふたりとも、頭の中に理想の家を思い描いていました。私の理想の家は、愛し愛される人々と太陽の光と温かさに満ち、創造的な活動とおいしいような料理のおいの漂う、木々や花に囲まれた家でした。夫にとっては、世の喧噪から逃れた平和な安らぎの場で、温かみがあって落ち着いた所。暖炉には火があって、ぎっしり詰まった本棚と好きな音楽とおいしいにおいに包まれた家。それが彼の理想の家でした。ふたりが出会い結婚したとき、理想の家の建設を優先順位の上位に置きました。それは、この地上で身の周りの環境を整えることが、主からいただいている管理の責任を賢く果たすことだと感じたからです。(もちろん自分で建てなければ私たちの望むような家は手に入らないという事情もありました)私たちはウィンストン・チャーチル(イギリスの政治家。1874—1965)の次の言葉を信じたのです。「まず建物を作れば、建物が私たちを作ってくれる。」私たちは何年も

著名なデザイナーや建築家の作品を研究したり、実際に家を見学したりしました。その後、ついに理想的な立地条件の敷地を見つけて、真剣に建設計画を立て始めました。敷地購入のローンを支払いながら計画をして、本や雑誌、また見学した家から資料を集めたのです。その資料はフォルダーからはみ出し、箱に集められ、ついには数箱に収められるほどの膨大な量になりました。

最初は自分たちで図面を引こうとしたものの、頭の中の構想を図面に表わすのは予想以上にむずかしく、結局設計士の手を借りることになりました。設計士の方は家はどうかという点について私たちの考えと一致しており、私たちの望むような家を作る助けをしたいと意欲的に取り組んでくれました。実際、専門家として私たちの考えも及ばない点まで補ってくれました。設計中も建築中も助けと導きを求めて祈りましたが、祈りの答えはしばしば思いがけない方法で与えられました。

建設業者の中には、私たちの予算の範囲内で望む家は建たないと言う人たちがいました。夢は捨てなさい、と忠告する人もいました。「標準的な間取りの方が安いし、簡単だ」と言うのです。でも、私たちは簡単なことに興味はありませんでした。私たちには夢があったからです。そこで建築は自分たちですることになりました。

建築中はすばらしく楽しくもあり、ときには失望もしました。非常に長く、終わりのない作業のように思えましたが、足場ができ、基礎工事が終わり、壁ができるというように、わずかながら家の形ができていきました。ときには理想を曲げて現実に譲歩しなければならないこともありました。設計士にも再三助言を求めました。来る日も来る日も懸命に働き続けました。あるときは壁を立てたり、床を張るといような大仕事をすることもありましたが、多くは表面には出ないものの、重要な小さな仕事の繰り返しでした。ほとんどの作業は自分たちでしたのですが、私たちにはない技術や道具を有する専門家の助けを仰ぐこともありました。

そうこうするうちに、ついに記念すべき日がやってきました。荷物をまとめ、夢の家へ引越したのです。完



全とは言えないものの、温かくて愛し合う人がいて、太陽の光と創造性、本、音楽、そして料理のにおいが漂う家です。真夜中過ぎや朝6時前なら静寂を味わうこともできます。

日の光栄の家庭を作ることは多くの点でこの経験と似ていると言えるでしょう。まず必要なのは、現実を超えた夢です。結婚することは家を建てる完全な場所を見つけるようなものです。これによって何ができるか、どんな困難が生じてくるか、ある程度見えてきます。世の中には、家族のあり方や子育てにいろいろな意見を持ち、助言してくれる人々が多いものです。しかし助言には気をつけるべきです。彼らの見識には限界があって、ときとしてゆがんでいたり、流行のように変わることも多いからです。永遠の視野を持つ唯一の設計士は主イエス・キリストしかいません。主の設計図は聖典の中に収められており、いつでも個人的な啓示を通してそれを確認することができます。もし主の設計図を研究し、それに従うならば、自分の力では考えることもできなかったような新しい面を増し加えられるのです。

家族を育てるのは、家を建てるのに似てしばしば挫折きざつもあり、また平凡な事柄の繰り返しでもあります。結果がなかなか見えないことが多いですが、ときとして進歩していると思えるときは楽しく、続けていくことに勇気が持てるのです。失敗して、ときには妥協しなければならないことがあるかもしれませんが、設計士である主と連絡を取り、設計図を研究しては失敗を正し、問題を解決していくのです。自分の夢の家族を作っているからこそ、専門家が割に合わないと思うような、手のかかる特別なことでも喜んでできるのです。子供たちに食事を与え、服を着せる以上のこと、つまり肉体と精神と霊に刺激を与え、神から賜った能力を最大限に発揮させることができるのです。



ときには専門家の助けを借りることもあります。それは医師であり、歯科医であり、音楽やダンスの先生、スポーツのコーチであり、保育の専門家でもあります。しかし、私たちの仕事を全うするうえで、あまり多くの「専門家」の手を借りないように気をつけなければなりません。なぜなら、私たちの設計図を見たこともない人に自分の責任を引き渡すことになりかねないからです。自分の設計図に忠実に従うことが大切です。

たとえそれが世の流行に合わなくとも、また近所のどの家族とも異なっていてでもです。

家の建築と違って、家庭を築くことには終わりがありません。子供たちが成長し、その必要が変わっていくに従って、私たちの「建築工事」の段階が変わっていただけます。聖典という設計図のすばらしい点は、どんな家族の段階にも対応できることです。

家の建築で得られる大きな喜びも、神の王国の基地建設がもたらす大いなる喜びには匹敵しません。父として、また母としての役割は、現在の社会では軽視される傾向にあります。しかし、親としての責任を軽んじる人々は、私たちのように栄光ある業に励むことから来る喜びを味わった経験がないに違いありません。

### 備え——生涯の目標

私の考えでは、母であることに喜びを見いだすには次のふたつの点が必要となってきます。それは備えと有能さです。

家の建築の前にはたくさん準備が必要です。建築に携わる人たちは、技術を習得し、敷地や希望する家の形状、建材、気候、それに居住者の希望に応じた設計をしなければなりません。母親は(父親も同じですが)成功を収めるためには準備を怠ることはできません。母親になろう

と思う人は、可能な限り家事や家計、室内装飾、育児に習熟することが賢明でしょう。母親としてこのような技術を身につける努力を続け、能力の向上を目指すのは必要なことです。結婚前にこのような技術の習得を怠った女性がよい家庭経営をするためには、かなり深刻な詰め込みの勉強を余儀なくされるでしょう。教義と聖約第88章にある主の宮居の設計図では、秩序ある家がひとつの鍵となっています。そして、家事の技術を身につけることが秩序ある家を約束するのです。

### ..... 学びの家

しかし、秩序があるだけでは十分とは言えません。主は学びの家としても備えるように戒められました。これは生涯の目標とすべき備えです。この雰囲気作りをするのが私たち母親です。私たちの存在は家族が飲む泉のようなものです。私たちが満ち満ちて惜しみなく与えなければ、家族の心は乾いてしまいます。私たちの備えは学びと信仰の貯水池となるべきであり、祈りや断食、神殿参入、そのほか個人に合った方法でその貯水池に水を補給しなければなりません。

私たちは機会に恵まれています。学校へ行ったり、働いたり、旅行をしたりできますし、様々な状況で人と交わり、伝道に出たり、才能を伸ばしたり、新しい物に興味を持ったりすることもできます。

私は職業上必要な技術と趣味の両方を併せ持つことが好きです。女性にとって家事は少なくとも職業上の技術であるはずで、(人によっては趣味でもあるかもしれませんが)私たちは家事以外の職業上の技術を身につけることもできますが、それに加えてできるだけ多くの趣味も開発すべきだと思います。音楽の趣味を持つ女性は特に恵まれているように思われます。家族もその恩恵を受けます。今まで多くの女性が美術や科学、数学、園芸、裁縫、料理、室内装飾、大工仕事、スポーツ、買い物、看護などの才能によって家族に祝福を及ぼすのを私は目にしてきました。女性の数だけ様々な才能があるのです。

私の趣味は文学と歴史です。大学時代は特に調査活動が好きでした。そのときの訓練が随分役立っています。私の子供たちが新しいことを学ぶのが好きなのは、幼いときから彼らの持ち出す質問に、一緒に答えを調べてきたことに多少原因があるかもしれません。百科事典や年鑑で、大西洋の深さや宇宙の惑星の名前、モーツァルトの生涯を調べるとき、我が家は真に学びの家だと感じます。

趣味は家族を祝福するだけでなく、私たち自身の貯水池の隠れた泉をも潤してくれます。救いようのない日も、たった数分、詩や短編小説を読むことによって元気づけられるものです。もし、しばしば祈り、赤ん坊に授乳しながら歴史の本を読めるなら、私はストレスを知らずに生活できるでしょう。

しかし、こんな学習でも、霊的な備えをおろそかにするならば、家族にとって何の価値もなくなります。主は私たちの家が、秩序と学びの家だけでなく、信仰と祈りと断食の家にもなるように教えられました。才能を伸ばすだけでなく証も強め、そして教科書だけでなく聖典も学ぶ必要があるのです。

備えられた女性を最も美しく描写しているのは、私の知る限り箴言第31章10節から31節です。作者は日常的な例を用いてはいるものの、たとえの多くは含蓄があります。この聖句の全部が熟読に値するものですが、ここでは一部分だけを例に挙げてみましょう。

「また商人の舟のように、遠い国から食糧を運んでくる。」(14節。食糧だけでなく、家族のために物質的、情緒的そして霊的な糧も運んでくると思います)

「力をもって腰に帯し、その腕を強くする。」(17節。紛れもなく彼女は定期的に運動して、肉体的に強く健康になっただけでなく、精神的にもより安定しているに違いないのです。きっと定期的な霊的運動として聖典学習と祈り、断食も怠らずに、信仰を強めているのでしよう)

「そのともしびは終夜消えることがない。」(18節。クリスマスのプレゼント作りに遅くまで起きているだけで





しょうか。そうとは思えません。彼女の証は困難な暗黒の時にあっても輝く光のように家族を照らすのです)

「彼女は口を開いて知恵を語る、その舌にはいつくしみの教がある。」(26節。女性はこの資質を身につけるよう十分考えるべきでしょう)

### 理想を追及する姿勢

家にも様々あります。単に雨露をしのぐだけの家もあれば、愛といたわりとをもって作られた家もあります。そんな家は雨露をしのぐだけではなく、そこに住む人の生活も豊かにしてくれます。このふたつの異なった家は、ただ慢然と母親の役割をこなすことと、理想を求めてその業に取り組むことの違いを象徴しているかのようです。地上における主の創造物を見るにつけ、私には主が、手間を惜しんだり経済性を優先させたりするお方とは思えません。夕焼け、星のきらめく夜、松の木、そして桃の花も、神が栄光をごく細部にわたってまで創造されるお方であると思ひ起こさせてくれます。神の家は栄光に満ち、考え得る限りの理想的なものであるべきです。

主は、ご自身の教えに従えばさらに豊かな生活を送れると約束されました。また何事につけ、2マイル行くことが喜びと豊かな恵みをもたらすと教えられました。もし私たちが母親として最小限のことしかしないなら、いらいらしたり、惨めに感じたりすることが多くあるでしょう。より多くの仕事をし、母親としての仕事を創造的なレベルまで引き上げようとするなら、必ず喜びを味わうことができます。

おむつの交換という多少気の重い仕事を例に取りましょう。この仕事を必要悪ととらえて、来る日も来る日も繰り返さなければならないことに不満を持つこともできます。しかし、大事な子供の養育の一部と考えれば、必要に応じて速やかにおむつを替えて子供が気持ち良く清潔でいられるように気を配ることができるでしょうし、汚れたおむつもすぐに始末するでしょう。(置いておけば価値が上がるというものではないのですから)子供と

ふたりきりの時を、特別に愛情を注ぎ世話をする機会にもできるでしょう。このように考えれば、ある程度の満足感は得られるものです。いずれしなればならない仕事です。これは選びの問題です。私たちの望むのは単なる雨露をしのぐだけの家でしょうか。それとも、それ以上の家でしょうか。

福音に生きるうえでの理想を追及する姿勢が、私たちの小さな基地をこの世の家庭から際立たせてくれるはずです。そのためにも私たちはさらに努力し、主と一致して主の設計図(聖典)に精通し、子供をよく教え、より栄養豊かなおいしい食事を作り、ホームメイキングの技術を伸ばして才能はぐくまなければなりません。しばしば引き合いに出され、中傷の的となる「スーパー・モルモンマザー」であって、何が悪いのでしょうか。だれでもそうになれるのですから。それは私たちが皆同じでなければならぬという意味ではありません。あるスーパーマザーは子供たちに歌を、別なスーパーマザーは算数を教えるかもしれません。スキーを教えるスーパーマザーもいるかもしれません。何を、どのように教えるかは問題ではありません。大切なはその姿勢です。私たちが絶えずこの世のもの以上であらうとすると、私たちは「最もすぐれた道」(Iコリント12:31)に従っていることになるのです。

理想を求めれば様々な点で報いがあります。与えられた仕事を愛することにより、それを通して成長します。そして家族も高められ、天から私たちの働きに対して承認を得られます。何にもまして幸福と愛と神の栄光が家にあふれ、真に秩序の家、信仰の家、祈りの家、断食の家、学問の家、そして栄光の家となるのです。

### ユーモアのセンス

理想的であることは、必ずしもしかつめらしい顔をしたり、常に額に汗したりすることではありません。家庭生活はいつも眉根にしわを寄せて過ごさなければならない固苦しい場所ではありません。ユーモアのセンスは理



想を迫るうで欠くことのできないもののひとつです。ユーモアがないと、批判的になりすぎたり、失敗したり、逆戻りしたりしたときに簡単にくじけてしまいます。ユーモアとはほかの人を笑い者にして傷つけたり不親切にしたりするものでなく、自分の失敗を笑いとし、またやり直せるようなものでなければなりません。実際ユーモアと理想は、相性の良いものだと思います。



偉大なことを思っても、神に近づくことはできません。この地上とそこにあるもろもろのものこそが、偉大な教室として機能するように設計されているのです。日の光栄の特質を身につけるのに必要なものは、この地上にあるのです。私たちが神の家という日の光栄の環境を作ろうと地上での必要な業に励むときに、神性は育っていくのです。きれいな床や整頓されたベッドや戸棚が日の光栄の環境の一部なのです。子供たちに

もそれを教えなければなりません。2歳でおもちゃを片づけたり、3歳で自分の寝床を整えたり、そんなところから教え始められます。

しかし、日の光栄の環境は清潔で整頓されているだけではありません。学びの場でもなければなりません。これは家族を聖典学習の場、信仰と祈り、断食の場とせよ、ということかもしれません。家族で祈り、子供に祈ることを教え、家庭の夕べを開き、共に教会に集うことが日の光栄の環境作りに貢献するのです。こうしてもし、行動や言葉の一つ一つが主のみこころに添う、愛に満ちた栄えある家庭を築くことができれば、星の光栄でのしがらみを抜け出して、この小さな基地を天まで上げることができるでしょう。

母であることは喜びの多いものです。胸躍る体験であり、やりがいのある楽しいものです。反面、母親はひとり残らず最善を尽くすように求められています。子供を世に送り出すこと、その子供たちを養育するための家庭を作ることが母親の務めです。母であることは夫および主との共同事業なのです。どうか私たち一人一人がこの神の王国の基地で、みずから創造できる栄光のひらめきを見いだすことができますように。□

### 日々の仕事—神よりの賜

母親としての仕事はおむつ洗いと繕い物だけではありません。そのような仕事に時間の多くが費やされますが、それが私たちの本来の仕事ではないのです。私たちの仕事は子供を育てることです。しかも、子供が可能性を実現できるように育てることなのです。この地上での成功だけを心に留めているとしたら、あまりにも近視眼的な態度であると言えるでしょう。子供たちが成功するとは、日の光栄の王国を継ぐことなのですから。家族として過ごしているこの子供たちは、神の賜というだけでなく、未完成の神々なのです。私たちの務めは子供たちにこのすばらしい事実を知らせ、それによって神から授けられた可能性を彼らが実現できるような生活を送ることにあります。

繕い物、皿洗い、庭の手入れ、床掃除や寝床の片づけもすべて神からの賜です。なぜなら、このような仕事を通して私たち自身の神性を高め、子供たちに自分の神性を高めるよう教えることができるからです。私たちは皿洗いやおむつの洗濯、床の掃除とは無関係に義人になるのではなく、床を掃き、庭の草を取り、赤ん坊の世話をしながら学び、肉体的にも精神的にも成長するのです。この世の問題から隔離された真空状態では、成長することはできません。何も無い真っ白な部屋にひとり座って







扶助協会150年祭

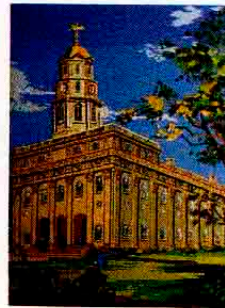
# 世界に広がる 姉妹の輪



ノーヴー神殿の建設中、ノーヴーに住む姉妹たちは、時間を捧げ、様々な形で奉仕することを求められました。エライザ・R・スノー姉妹は、姉妹たちの力を組織して効果的な働きができるようにするため、女性団体の規約を起草しました。

ジョセフ・スミスはそれを読んで賛成したばかりか、さらに踏み込んだ内容を望み、次のように語りました。「私は姉妹たちを……神権の形態に倣って組織する。扶助協会が組織されて初めて、この教会は完全な組織を持つに至った。」（「扶助協会誌」1919年3月号, p. 129）

1842年3月17日、「ノーヴー女性扶助協会」が正式に組織されました。エマ・スミス姉妹が会長に召され、エライザ・R・スノー姉妹が書記に



任命されました。20人の女性と3人の男性がこの会合に出席していました。

以来、扶助協会は128を超す国や領土に、178万人以上の女性を擁する国際的な組織に発展しました。扶助協会の女性たちは共に協力し合って自らの才能を伸

ばし、姉妹たちの間で、また、家庭や地域社会の中で、その才能を生かしています。この結果、大勢の人々がキリストにより近い者となっているのです。

扶助協会の強調点は、長年の間、変わっていません。すなわち奉仕を学んで、キリストの弟子になることです。中央扶助協会会長会が、特に重要な点として挙げている項目を、以下のページに掲載します。

## 上 「ノーヴー神殿」

ヘルガ・ステフェル、ドイツ・オストフリーラント、1986年制作。

ウールと合成繊維を使ったこのししゅうは、

1967年のスティープン・ベアード作の絵を下絵にしている。

## 左 「ノーヴーにおける扶助協会の始まり」

ネイティーン・バートン(1921-1989)、

ユタ州プロボ、油彩画、1986年制作。

予言者の指示の下に、

エマ・スミス姉妹が扶助協会の最初の集会を管理している。





### 「愛はいつまでも絶えることがない」

第一次世界大戦が勃発すると、「ユタ扶助協会」は戦時中に小麦の貯蔵を売却し、その資金を用いて妊産婦と新生児の世話をした。

以来、小麦が人々の世話をする扶助協会活動のシンボルになった。

上の写真の盆は1950年代のブラジル製で、ちょうの羽で飾られている。

（『SS』のイニシャルは、ポルトガル語で「扶助協会」を表わす）

盆と、左下のブローチに描かれているのは、扶助協会のシンボルである小麦と、愛についてのモットー。

このシンボルとモットーは、右下の扶助協会150年祭のマークにも使用されている。







## 個人の証を築く

「パッチワークによる  
愛のイメージ」

(マラキ4：6参照)

マーサ・ベガ・リチャーズ、  
カリフォルニア州セリトス、  
油彩画、1989—1990年制作。

私たちは一生の間、  
祈りや聖典の勉強、  
福音の誠実な実践  
などを通じて、  
日々証を築いている。  
過去を振り返ると、  
こうした思い出の数々が  
織り合わさって、  
家族関係や、  
主に対する静かな献身  
という見事な作品に  
なっていることに気づく。



## 自分自身を尊ぶ

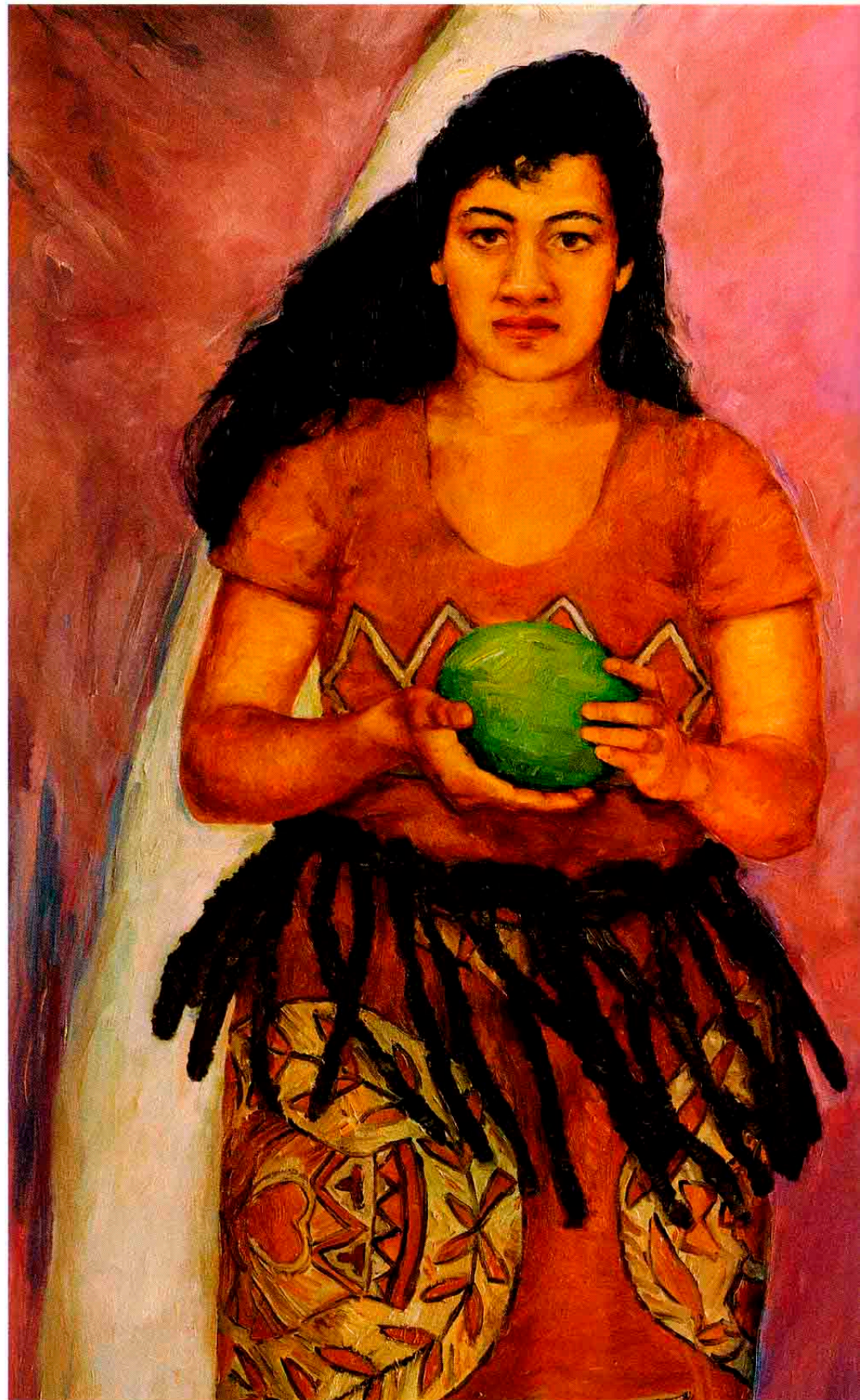
「実を結ぶ種」  
(創世49：22参照)

ローリー・オルソン・  
シュノーベレン，  
カリフォルニア州アルタロマ，  
油彩画，1990年制作。

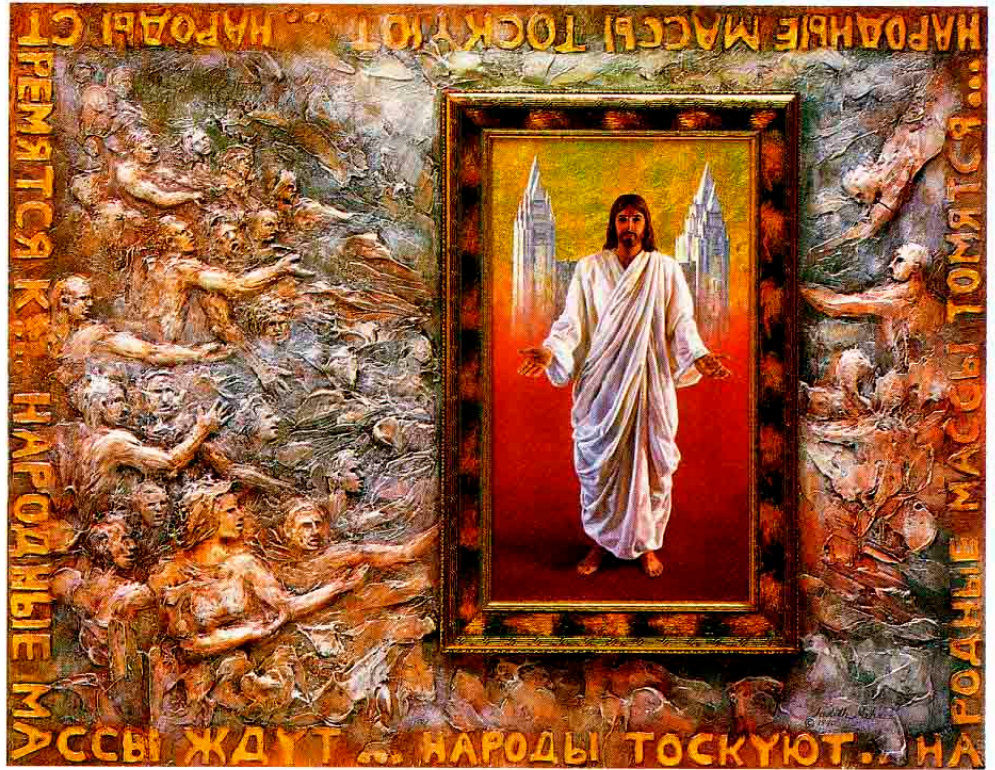
すべての女性は，  
自らの生活を豊かにする  
文化遺産を  
受け継いでいるだけでなく，  
自分だけが  
天父に捧げることのできる  
独自の賜を持っている。

この絵は  
ヨセフの血統，  
ポリネシア人を代表する  
トンガの女性を描いている。

手に持つ実は，  
女性が持つ才能の  
限らない可能性を  
象徴している。







## 愛をはぐくみ，実践する

「民衆は求めている」(マタイ11:28参照)

ジュディス・メア，ユタ州ウェストバレーシティ，  
木彫と金箔を施した油彩画，1990年制作。

家庭や地域社会，国の内外で，大勢の人々が福音の光を求め，  
暗中模索している。世界各国の扶助協会の姉妹たちは，  
真理を求める女性たちに手を差し伸べることができる。

ブリガム・ヤング大学の家族関係学部創設に尽力した  
バージニア・カトラー姉妹は，

1969年，ガーナでの家計管理計画の普及に尽くした功績により，  
ガーナのアシャンテ族から「酋長の座」(左)を授与された。

これはアシャンテ族最高の榮譽を表わす。

(現在「酋長の座」は，教会歴史美術博物館に所蔵されている)







## 家族を強める

「受け継ぎ」(使徒20:32参照)

ジーン・レイトン・ルンドバーグ・クラーク、  
ユタ州プロボ、油彩画、1990年制作。

家族の伝統は、身体の特徴と同じように、  
親から子供へと後の世代に引き継がれる。  
イエス・キリストの福音は心をひとつにし、  
人を強める感化力を持っている。

この絵の陰影のない豊かな色彩は、  
教会の基本単位である家庭に満たすことのできる真理の光を象徴している。

子供は家族に祝福とチャレンジをもたらす。

右は、世界各地の赤ちゃん用のキャリアーで、  
上から、東南アジアのモン族、  
ユート(アメリカインディアン)、マヤ(メキシコ人)のもの



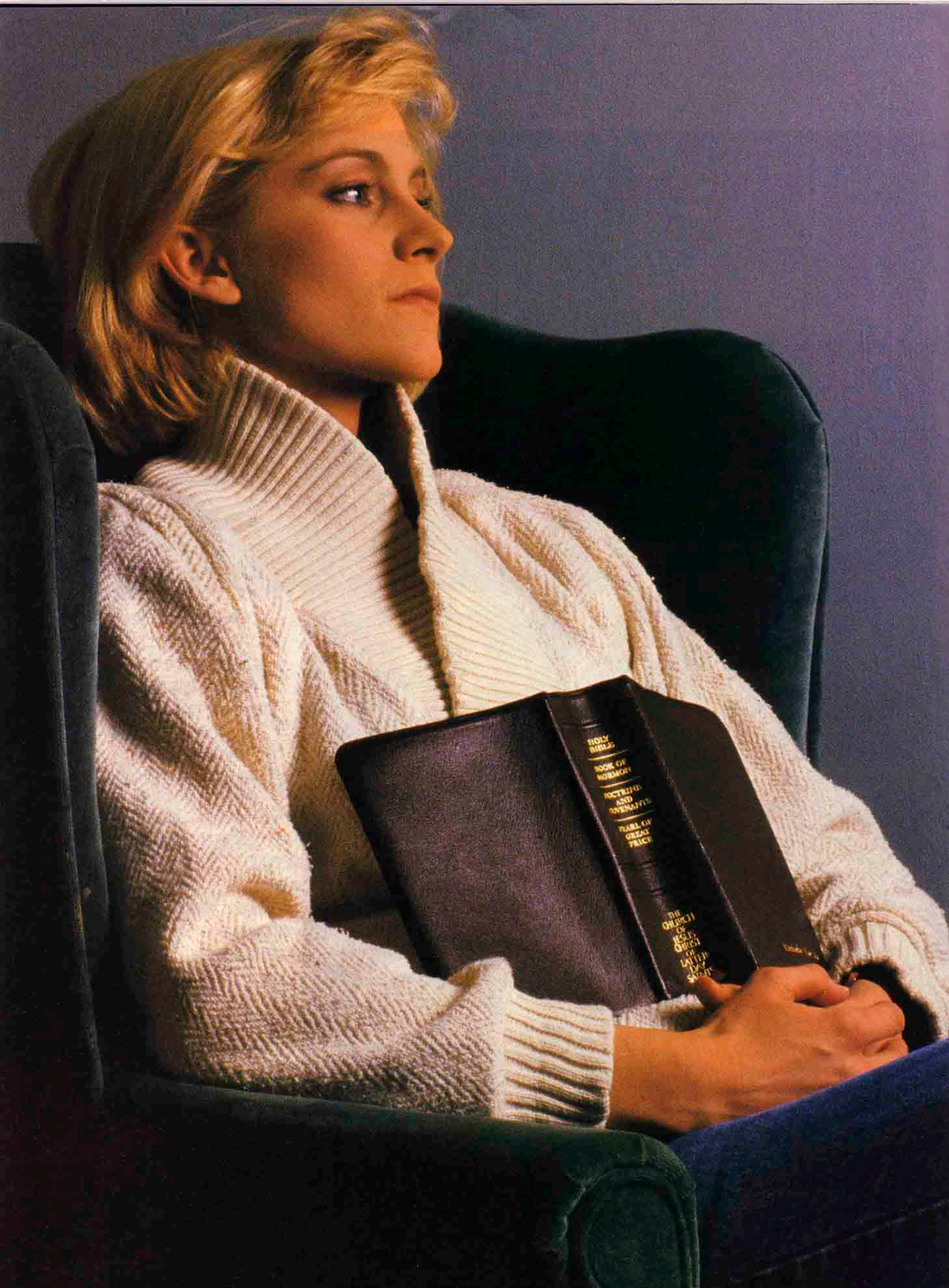




## 姉妹たちの 一致を楽しむ

「墓の前の3人の女性」  
ミネルバ・タイカート  
(1888—1976年)、  
ワイオミング州コークビル、  
油彩画、1947年制作。  
キリストの墓の前に集まった  
マグダラのマリヤ、  
ヤコブの母マリヤ、サロメが  
キリストの復活を告げる  
天使を見上げている。  
(マルコ16：1—8 参照)  
この姉妹たちは、後に、  
主に共に仕えることになり、  
共に主の復活を喜んだ。  
今日、扶助協会では、  
姉妹たちがひとつとなって  
主を礼拝する祝福を  
享受できるように、  
その機会が用意されている。□





HOLY BIBLE  
BOOK OF MORMON  
DOCTRINES AND COVENANTS  
PEARL OF GREAT PRICE

THE CHURCH OF  
JESUS CHRIST  
OF LATTER  
DAY SAINTS



# 霊的な活力の 再生

末日聖徒の女性として  
霊的な蓄えを  
補っていくには

シャーリーン・ミック・サンダース

ユタ州リンドンのフィリス・ピーターソン姉妹は、子供たちをそばで見ていると、1日中口げんかをしているように感じると、友人に話したことがあります。「多分、問題は私にあるのでしょうか」と彼女は言ったのですが、そう言ったとたん、その言葉に心が動きました。

ピーターソン姉妹は、自分の生活で改善できる点は何だろうかと考えるにつれ、マリオン・G・ロムニー副管長の言葉を思い出しました。ロムニー長老は、もし両親がモルモン経を定期的に祈りをもって読むようにするならば、いがみ合うようなことは家庭からまったくなくなるだろうと言ったのです。（「聖徒の道」1980年9月号、p.102 参照）家族では聖典を読んでいましたが、ピーターソン姉妹は個人の勉強を怠っていました。「そのとき、変わろうと決心したのです」と、姉妹は言います。「それからは、1週間もしないうちに子供たちの仲が良くなっていきました。どうしてだとお思いですか。私は穏やかな態度で、子供たちを上手に諭せるようになったように思うのです。」

ピーターソン姉妹と同様、世界中の末日聖徒の女性たちが、自分の霊的な力が強いときは穏やかに生活できる

と言っています。では、ほかにすることがたくさんあって忙しいときに、どうしたら霊的な蓄えを増していくことができるのでしょうか。

## 霊の成長を優先させる

「何にしても、『時間が見つかる』なんていうことはないのでわかりました」と語るのは、コロラド州ラブランドのジャネット・E・バック姉妹です。「時間は作るものです。霊性をはぐくむことに関しては、特にそうだと思います。私たちは、霊的な飢えの苦しさとは一体どういうものなのか知らずにいることがよくあります。それを、失意や憂うつ、怒りや恨み、寂しさ、自己憐憫などの気持ちと勘違いしてしまっているのです。このような気持ちはどれも、霊的な飢えの兆候ではないでしょうか。」

メリーランド州コルズヴィルのカレン・フリーマン姉妹も同様の考えを述べています。「私の場合、霊の成長のために時間を見つけることは、ほかのことに時間を取るのと同じように考えています。つまり庭の草取りや電話をかけるといったことと同様に、リストに組み

入れればいいのです。」

生活をもっとシンプルに、望みをもっと現実的なものにしなければならない、と考える女性が大勢います。「陸上で長距離を走っていたとき、完走するには、歩幅をゆっくり、大きくして、歩数を少なくするのが大事だとわかったんです」と語るのは、カリフォルニア州サンチーのトーニ・トーマス姉妹です。「私はこの原則を生活に取り入れて、何にでも手を出さず代わりに、することの質を高めるようにしました。以前に比べると聖典の読む量は少なくなりましたが、読んだ聖句に関してもっと深く考えるようになりました。子供たちにも、学校の課外活動があまりできなくても、その時間に集中し、上達するようにと教えています。また、この世的な望みを抱くにしても、霊的な必要を押さえつけてしまわないように気をつけています。」

### 自分のための時間を持つ

ユタ州ローガンのルイズ・ブラウン姉妹はこう言っています。「子供たちの習い事への送り迎えや食事の仕度、各種の集会といった家族のための仕事、あるいは自分の仕事をこなせるような予定を立てることについては心配していません。むしろ問題は、私たちが活動などから中座するときに『約束があるから』と言ってしまいがちなことです。むしろ、『これは自分のために取っておいた時間だから』と言うべきなのです。霊的な活力は、使うだけでは弱まる一方です。ひとりになって、霊的な面の英気を養うのは私たちにとって大切で、むしろ必要なことだと考えるべきです。」

アリゾナ州ギルバートのマリリー・P・ガラカー姉妹は、自分のことも優先すべきことのひとつと考えられるように、毎日、予定表に自分のための時間を書き入れています。モンタナ州ミズーラのアネット・S・ヒル姉妹は、たとえ何かの仕事が後回しになったり、中断することになったとしても、週に1回まとめて3時間を作り出すという方法を取っています。そしてこの方法が自分には合うと言っています。彼女は毎日聖典を読む一方で、その時間に美術館へ行ったり、読書や散歩をしたり、仮眠を取ったり、あるいは手芸や友達とのおしゃべりを楽しんだり、家族の歴史をまとめたり、ピアノの練習をしたりしています。

### 源に心を向ける

「霊性の再生の絶好の場は、その源にあり、そこへ行くための鍵となるのは祈りなのです。」と語るのは、カナダのオンタリオ州ロンドンのジャネット・ラマーズ姉妹です。「お祈りは、真心さえあれば、『どこでも、いつでも』用いることのできる便利な手段です。」

ユタ州サンディーのジュニア・サント姉妹は、「きょうは忍耐、あすは肉体的な力、あさっては平安な心というふうに、私たちにどんな助けが必要か、天父はよくご存じです。これはすばらしいことだと思いますか」と言います。サント姉妹は、子育てに必要な導きを受けるために、毎朝毎晩祈らなければならないことを知りました。彼女は、すぐその場で天父から答えをいただきたいときは、子供たちにも、おとなしくして祈りに加わってもらうそうです。

1日中、心に祈りの気持ちを抱いていることも大切です。カリフォルニア州ダンビルのキャロル・タトル姉妹は、以前のことを思い出してこう語ります。「私は四六時中、家族の必要を満たすために忙しく働き、天父に近づくための時間がどんどん少なくなっていくことに、気落ちしていました。しかし、天父は、私が毎日分刻みで働いていることをきってご存じで、日常の生活を通じて、教えを与えておられるのだと思うようになりました。救い主は、ペテロには船の上で、ふたりの弟子にはエマオに行く道の途中でお教えになりました。同じことを、私になさらないでしょうか。私は洗濯物をたたむときや、ニンジンの皮をむくとき、また車を運転しているときに、天父に語りかけることができました。泣く子をあやしているときや、痛いところをなでてやっているときに、天父の助けをいただきました。」

### み言葉を味わう

カリフォルニア州エルクグローブ在住の、エバ・ローレント姉妹は、ひとりで6人の子供を育てています。彼女は次のように言っています。「優先すべきことがたくさんあって、頭が混乱したとき、天父に助けを求めました。実際の手助けがほしかったのです。あと2本の手と、丈夫な背中と、考える頭と。天父が私に送ってくださったメッセージは、モルモン経を毎日読みなさい、でした。この本が私の眼前に表わしてくれたものは実にすばらし



靈的に成長するための時間を作ることは、どんなに大変でも努力するだけの価値があると、末日聖徒の女性たちは皆口をそろえて言います。ある姉妹はこう言っています。「イエス・キリストの教えに結びついた行ないのた

いと、今も思います。」

聖典の勉強を続けていれば、物の見方が変わるばかりか、問題への対処の仕方も変わってきます。ジョージア州カントンのスーザン・ワイマン姉妹は、いつにも増して疲れた1日の終わりに、バランスを取りながら赤ちゃんを小わきに抱え、腕白な3歳の子の機嫌を取りながら、さらには、夕食の支度をしていました。このようになってこ舞いの最中に、3歳の子がカウンターにある卵の入ったケースを引っ張って落としてしまい、磨いたばかりの床全体に卵が割れて飛び散りました。ワイマン姉妹は、いつもの自分なら怒ったはずなのに、そのときは息子のびっくりした様子とすまなそうな表情が目に入ったと言います。わざとしたのではないとわかると、彼女は取り乱さずに後片づけをし、不器用な手つきで手伝おうとする子供にもやさしく接することができました。

「そうできたとき、どうしてそんな忍耐ができたのかしらと考えました。朝起きて、聖典を勉強したからだと、みたまは教えてくれました」と、ワイマン姉妹は言っています。

それにしても、多忙な女性たちは、どのようにして勉強しているのでしょうか。オレゴン州コーバリスのロリー・R・ギップス姉妹は、毎日聖典を読むのを目標にしています。1章かそれ以上読める日もあれば、1節か2節しか読めない日もあります。しかし、読み続けることで靈性や知識欲が増しました。また、その望みが強くなったおかげで、福音を勉強する時間を「見つけられる」ようになったとも言っています。

毎日、数分間でも読むという人たちがいます。「24時間の中から睡眠時間を10分や15分削ったからといって、健康に大した影響はないと思います。それを勉強に充てれば、靈の健康に随分と違いが出てくると思いますよ。」こう語るのは、ユタ州ソルトレークシティのリス・ニューマン姉妹です。「その時間のおかげで、はつらつとして忍耐強い妻や母親でいられるのです。」

### 主の器になる

ワシントン州タコマのジェネバ・スミス姉妹は、このように話しています。「自分の生活を振り返ってみると、靈的な経験というものは、計画して得られるものでないことがわかります。家や教会、地域社会で働いているときに、不意に経験するものなんです。」スミス姉妹は、

めに特別な時間を取ることで、毎日のちょっとした問題や、ときどき直面するむずかしい問題を、乗り切る力がわいてくるのです。」

がんに冒された姉妹の家庭訪問教師に召されたとき、6週間にわたって1日おきに病院へ見舞い、彼女に付き添いました。「それまで、その姉妹のことはよくわかっていて、愛していると思っていました。しかし、自分は本当の彼女のことをわかりかけているだけなのだ、それからしばらくして気づきました。足をもんだり、髪をとかしたり、痛む体をお風呂に入れてあげたりしているうちに、その姉妹を本当に愛するようになりました。自分を捧げるとき、杯があふれるのですね。」

カナダのノバスコーシア州ダートマスのジャネット・マクレナン姉妹も同様の考えを述べています。「隣人やワード部の姉妹のために時間を取って、悩みや問題に耳を傾けていると、さらに『主が見られるように見る』ことができ、キリストのような愛が心に満たされるのを感じます。私にとっては、それは最もすばらしい靈的な養えとなっています。」

### 教会の召しを生かす

「私にとって、靈性の鍵を握っているのは家庭訪問です」と、アラスカ州アンカレッジのデビー・オズボーン姉妹は言います。「家庭訪問はほかの人の福利を考えて靈的に敏感になれる機会です。しかしそれは、まず自分が成長しなければできません。私は毎月の家庭訪問メッセージを伝えるときも、一人一人に同じレッスンはしないようにしています。そのためには、その人に本当に必要なものが何かわかるように、1カ月の間、毎日、その人のことについて考えることが必要なのです。」

教会の召しを果たすうえで主に頼ることを学ぶと、みたまが豊かにもたらされます。ユタ州アメリカンフォークで初等協会会長をしている、レーチェル・マードック姉妹は、初等協会では何らかの責任にだれかを推薦しなければならないとき、単純に、別の組織の召しを最近解任になった人や、ワード部に転入してきた人の名前を提出することがよくあったそうです。しかし現在は、召しの一つ一つについて、祈っています。「結果が変わったかどうかまではわかりません。しかし、自分の選択が天父に受け入れられたという確認を、みたまから受ける機会になっています。」

カリフォルニア州チノのジョーン・W・カッツ姉妹は、こう言っています。「初等協会では働いているおかげで、靈的な力をいただいています。子供たちに福音を教

えたいという気持ちがあるのが心の底からわいてきたのです。日曜の夜に翌週のレッスンを読み始めて、家庭の夕べで、家族を相手にレッスンの練習をすることもあります。福音の単純な真理を神様の子供たちに教えるにつれ、私の証は強まりました。」

### 心と体に運動を

「成長するにつれ、体と霊には強いつながりがあることに気がつきました。体の調子が悪いと、霊が肉体を支配するのは、とてもむずかしくなります」と語るのは、アリゾナ州ギルバートのメアリー・エレン・フレック姉妹です。

ユタ州ニブリーのケイ・サルブソン姉妹は、頻繁に襲ってくるストレス性の頭痛の治療として、医師から運動を勧められたとき、最少の時間と費用で運動する方法を、思いつきませんでした。駄目でももとの気持ちで、古いトレーニング用の固定自転車を買ひ、子供たちがテレビを見ている間にペダルをこぎました。すると効果が現われたのです。今、サルブソン姉妹は運動のために早足の散歩をしています。「周りに目を向けると、季節の変化の不思議さに感動します。また、神が創造された美しい自然に囲まれていると、心がへりくだります。そのせいで、様々なことを大きな視野で見ることができるようになります。減量のために歩いていると言う人たちがいて、それはそれで立派なことですが、私は、問題や失望を克服するためにも歩いているのです。」

### 日々の霊的な行ないに目を向ける

「日々の行ないを吟味すればするほど、日常生活で経験することに対して、霊の目や耳を集中させなくてはならないことが、さらにわかるようになります。霊的な力は、どんな環境にあっても養うことができるのです」と、イギリスのサザンプトンに住むマリオン・アレン姉妹は言います。

霊的に成長するための時間を作ることは、どんなに大変でも努力するだけの価値があると、末日聖徒の女性たちは皆口をそろえて言います。オレゴン州スプリングフィールドのバーバラ・ストックウェル姉妹は次のように言っています。「イエス・キリストの教えに結びついた行ないのために特別な時間を取ることで、毎日のちよっ

「何週間か前にどっと疲れが出たとき、私は友達に電話をして、遊びに行ってもいいか尋ねました。3時間以上も、一緒に話したり、笑ったり、泣いたりしました。霊的に随分励まされました。」

とした問題や、ときどき直面するむずかしい問題を、乗り切る力がわいてくるのです。いつも主に心を向けていると、自分の信仰が強められ、問題に取り組むのが少し楽になります。」□

## 協力

霊的に成長しようと努力している女性には、ほかの人、特に家族の協力が必要です。「家庭における女性の役割について、考えを改めなくてはならない家族が、案外多いのではないのでしょうか」と、オレゴン州グreshamのジェニー・ハンセン姉妹は問いかけます。「みんなで家事を手伝ってくれたら、皿洗い以外のことをする時間が持てるでしょうね。」

伴侶と共に、霊性をほぐすための時間を持つのも効果的です。ソルトレークシティのシェリリー・キルター姉妹と夫のカーン・キルター兄弟は、毎晩一緒に散歩しながら、考えたこと、感じていることを語り合います。時間を取って、聖典や「基督イエス」のような本を読んでいる夫婦もいます。

女性は、成長できるよう、互いに助け合うこともできます。コネチカット州チェシャーのメラニー・ウェブスター姉妹は4人の友人と一緒にモルモン経を勉強しています。毎週7章ずつ読み、水曜日に集まって話し合います。

ラスベガス・モーニングサンワード部の姉妹たちは、交代でベビーシッターを引き受け、順番に外出日を作っています。「ほかの姉妹の気力充電に一役買っていると考えると、それだけで、霊的な充実感が得られたりしますよ」と、ワード部のタミー・L・ブラッドリー姉妹は言います。

「ほかの姉妹たちと楽しく過ごす時間がもっと必要だと思えます」と語るのは、ジョージア州アトランタのルース・ロバーツ姉妹です。「何週間か前にどっと疲れが出たとき、私は友達に電話をして、遊びに行ってもいいか尋ねました。3時間以上も、一緒に話したり、笑ったり、泣いたりしました。霊的に随分励まされました。ほかの姉妹たちと話してみると、『こんな問題を持って、こんなふうを考えているのは、自分だけじゃないんだ』と感じるものです。」□

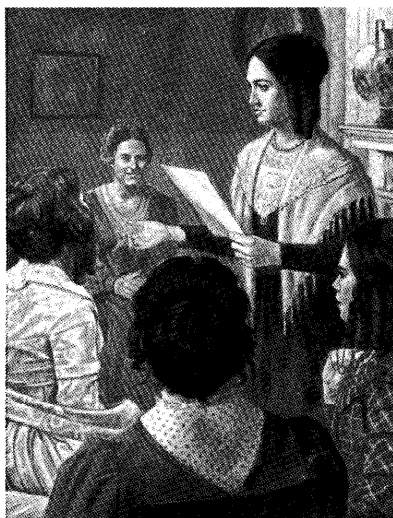






# 扶助協会の設立

中央扶助協会会長会



ILLUSTRATED BY ROBERT T. BARRETT

末日聖徒イエス・キリスト教会の扶助協会は、1842年3月17日、イリノイ州ノーヴーで組織されました。その日、20人の姉妹たちが予言者ジョセフ・スミスと共に集会を開きました。ジョセフ・スミスはその後間もなくこの組織を「世のあらゆる悪より切り離された選り抜きの徳高き神聖な協会」と呼んでいます。（「ノーヴー女性扶助協会議事録」1842年3月30日）

それから数カ月の間、姉妹たちはしばしば集い、困っている人々を探し出して、衣食住の世話をしました。当時扶助協会で副会長をしていたエリザベス・アン・ホイットニー姉妹は、「信仰に基づいた働きをなす」姉妹たちを称賛しています。（「ノーヴー女性扶助協会議事録」1842年5月26日）また、会計の責任をしていたエルピラ・A・ホームズ姉妹は、後に年間の献金報告の際に、このように述べています。「たくさんの良い行ないがなされ、多くの人の心が喜びに満たされた。」（「ノーヴー女性扶助協会議事録」1843年6月16日）

姉妹たちは霊的にも互いに高め合いました。エリザベス・アン・ホイットニー姉妹は、このように述べています。「共に集まり、神の王国に関する事柄について語り合い、互いを慰め、高め合うという特権にあずかれることを心からうれしく思いました。」（「ノーヴー女性扶助協会議事録」1843年7月15日）

ノーヴーの姉妹たちの意欲をかき立てていたのはどのような原則だったのでしょうか。

## 永遠に変わらぬ原則

今月私たちは、扶助協会設立150周年を共に祝います。扶助協会のモットーは「愛はいつまでも絶えることがない」であり、これは私たちの目的とするところでもあります。初期の扶助協会の姉妹たちは、「口を開いて知恵を語る、その舌にはいつくしみの教がある」（箴言31：26）と言われた「賢い妻」のような行ないをしようとしていました。

今日の姉妹たちもその精神を受け継ぎ、この永遠に変わらぬ原則をみずから模範として示そうとしています。スペンサー・W・キンボール大管長は、「教会の女性たちが義しいけじめのある生活を」送るとき、自分たちが従う永遠の原則へ善良な人々を導くであろう、と述べています。（『義なる女性の役割』「聖徒の道」1980年3月号、pp. 140-143参照）

チェコスロバキアのブルノで1982年にバプテスマを受けたオルガ・コバロバ姉妹も、そのような姉妹のひとりでした。オルガはモルモン経を紹介されたとき、「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」（II ニーフアイ2：25）という聖句が目にとまりました。

た。そして、生きるための倫理的また道徳的な意義を再発見するために、自国の人々にはそのメッセージが必要だと感じました。彼女が教鞭をとっていた大学の指導主事に、自分が宗教に関心を抱いていることを明らかにすることはできませんでした。自分のクラスやサマーキャンプで、感謝や責任、喜びといった人生哲学を教えました。そのようにして、彼女は自国の人々に知恵ある言葉を語り、励ましを与えたのです。（「BYU トゥデー」1991年3月、pp. 30-34参照）

知恵、親切、慈善奉仕の原則を、家族や地域社会の人々と分かち合うにはどうしたらよいでしょうか。

## 扶助協会の使命を続けて実践する

ノーヴーの扶助協会の姉妹たちが示した模範に従い、現代の扶助協会の姉妹たちも永遠に変わらぬ原則を実行に移しています。知恵、親切、慈善奉仕はまず家庭の中から始まり、地域社会にまで広がります。私たちには多くの才能が与えられており、様々な分野で働くことができます。

世界中の扶助協会の姉妹たちは、これからも困っている人々を探し続けることでしょう。私たちは隣人の物心両面にかかわる必要を満たさなくてはなりません。毎週行なわれるレッスンやそこで耳にする音楽を通して、互いに高め合い、言葉や親切な行ないによって証を伝え、共に奉仕しましょう。

扶助協会150年祭を迎えるに当たり、互いに励まし合い、知恵ある言葉を語り、ほかの人を助けるために働くことができるようお祈りいたします。□





中央扶助協会会長会長イレイン・L・ジャック姉妹（中央）と副会長のチエコ・N・岡崎姉妹（左）、アイリーン・H・クライド姉妹。





扶助協会の創立150周年を記念し、今月号では、世界に広がる姉妹たちのきずなの重要性が強調されている。また、扶助協会に所属する姉妹たちの記事も掲載されている。セシール・ペルー姉妹(写真)は、インドで大勢の人々の生活向上のために働いている。(本誌「セシール・ペルー インドでの愛と友情」p. 8 参照)



# 春の兆し

アジア北地域会長会第一副会長

ハンインサン  
韓仁相

**何** 週間か前の日曜日のことです。私は静岡に向かう電車に乗っていました。清水ワード部の教会堂を献堂するためです。電車は滑るように走り、快適で、外は晴れわたっていました。

私たちは、野や山といった自然を静かに楽しんでいました。とりわけ雄大な富士山を見るのを心待ちにしていたのですが、残念ながら、富士山は照れ屋のようで、低く立ち込める霧のために、その影しか見ることができませんでした。

この影が伸びる北側のすそ野は大部分雪に覆われていました。しかし一方で、南側のすそ野はすでに鮮やかな緑色になっていました。

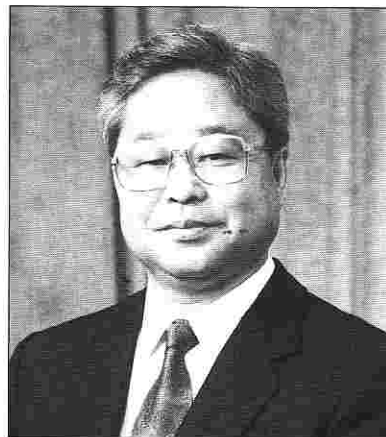
春はもうそこまで来ています。私たちが都会で教会の務めやそのほかの務めを忙しく果たしているうちに、春はゆっくりではありますが、確実に南から北上してきているのです。

伝道の書第3章には次のように書かれています。

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。

生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、

殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、石を投げるに時があり、石を集める



に時があり、抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、

捜すに時があり、失うに時があり、保つに時があり、捨てるに時があり……。」(伝道3：1-6)

冬の間中、野は死んでいるかのように見えました。かつては豊かに実を結んでいた軟らかく、肥沃な畑は、冷たい風と雪にさらされ氷に覆われて、固く冷たくなっていました。人々は、すべてが過ぎ去り、死んでしまったと感じていたのかもしれませんが。ですから、嘆き悲しみ、涙を流したのです。

そのような中であって、野から、また大気から次のような主のみ声が聞こえてきました。

「エルサレムよ、目を覚まして塵の中から立ち上れ。シオンの娘よ、汝は再び散り乱れないよう、また永遠の御父がイスラエルの家に立てたもうた誓約が果されるよう、その美しい衣を着、

そのくいを強くし、またとこしえにその界を広くせよ。キリストの御許に来てキリストによって全くなれ。すべて神のみこころに背くことを捨てよ。」(モロナイ10：31-32)

富士山の影は、大きく、寒々としていました。しかし一方で、南の野は、暖かさと希望があふれていました。私たちが今こそ、長かった冬の眠りから目を覚まし、美しい衣を着て、キリストのみもとに行き、「そのくいを強くし、またとこしえにその界を広く」しようではありませんか。

ホームティーチング、伝道活動、神殿活動、再活発化、これらは決して私たちの手に負えない、途方もない活動ではありません。必ずできます。今こそ、末日の聖徒としてホームティーチングや伝道活動、神殿活動、また再活発化を行なう正しい方法を見いだす時です。ここで大切なことは、ひとつだけです。すなわちすべて「神のみこころに背くことを捨て……勢いと心と力とをつくして神を愛する」(モロナイ10：32)ことなのです。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。共に神権を持つ皆さんの兄弟として、また友として、皆さんがこの春に天父が与えられる光の中で幸福に包まれるよう祝福いたします。

神は生きておられ、イエスはまことに私たちの救い主であられることを、イエス・キリストのみ名によって証いたします。アーメン。□

# ロシアに届けられた 教会の食糧物資

**ロ**シアに向けて18トン余りの食糧が1991年12月17日ソルトレークシティの中央監督倉庫から発送された。これは、サンフランシスコに本部を置く「児童平和促進協会」の後援による食糧援助活動に教会が参加して行なわれたものである。

教会を代表してドン・ルフェーブ兄弟が語ったところによれば、小麦粉、豆類、米、粉ミルク、肉の缶詰、アップルソースなどの食糧が、倉庫からト

レーラーでサンフランシスコに運ばれ、ほかの援助物資と共に、翌週、モスクワに空輸された。

児童平和促進協会の国際コーディネーターであるイレイン・ベレッツ氏は、これらの食糧はおもに孤児院や養護施設に供給されることになっている、と述べている。

この協会は、世界的な規模で児童福祉事業を進めており、この度の教会の援助はその呼びかけにこたえたもので

ある。サンフランシスコのソビエト領事館との折衝を経て、ソビエト政府からは3機の輸送機が提供された。

監督の倉庫には、教会福祉計画のもと、断食献金や教会員の労働奉仕による供給用の物資が貯蔵してあり、これによって教会は、今回のような救援事業に参加している。（「チャーチニュース」1991年12月21日付）



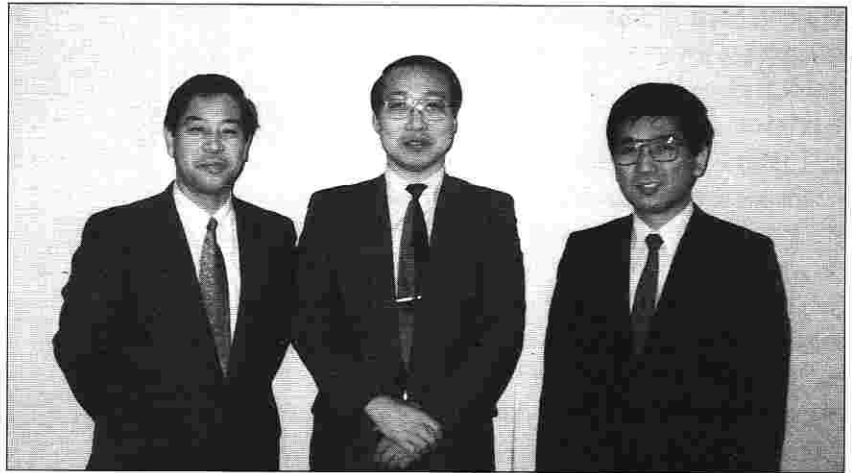
PHOTO BY TOM SMART

ソルトレークシティにある中央監督倉庫。ロシアに発送される食糧を荷積みするアーレン・ヘール兄弟。



## 再組織された新潟地方部長会

1991年10月20日に菊地敏伝道部長の管理の下で開かれた新潟地方部大会で、それまで8年間地方部長を務めた堀井哲二兄弟が解任され、新たに吉田博兄弟が地方部長として召されました。第一副地方部長には森井久兄弟(写真左)が、第二副地方部長には桐ヶ谷清一兄弟(写真右)が召され、その任に当たります。



### 主のみ手にあって その器として

東京北伝道部新潟地方部  
地方部長

吉田博

**教** 会幹部の通訳者として働くよう要請を受けて、全国に派遣され始めてから4年以上経過しました。その間、神の人である教会幹部のそばで仕えるという特権に恵まれてきただけでなく、素晴らしい地区代表や伝道部長、そして何よりも全国各地で献身的に働くステーク部や地方部の役員、信仰あつい兄弟姉妹にお会いできたことを、本当に大きな祝福と心から感謝しています。20年前に関西地方で伝道していた私にとって、昔一緒に働いた懐かしい会員たちに再会できるのは、まるで神様のみもとへ戻るときのリハーサルのようなものだと感じています。

通訳の依頼を受けたときには、その日に備えてできるだけ体調を整えるよう努めるとともに、幹部の言葉を伝える霊の器となれるよう、霊性を整えることをそれ以上に心がけます。普段あまり霊的とは言えない生活をしている自分にとって、訪問予定の幹部の大会説教を読み返したり、「聖徒の道」や「チャーチニュース」の記事を読んで



吉田博地方部長とご家族(左)

自分を整えるのは楽しい時間です。大会の当日はできるだけ自分を無にして、通訳を聞く人々が、通訳者の言葉ではなく、あたかも幹部がみずから語っているかのように聞こえたらと、心から願います。大会の帰途、「うまくできなかった」「失敗した箇所があった」と心が沈むときもありますが、幹部や地区代表の温かさや励ましで救われています。

神の人のそばに仕え、霊的な経験を数多くしてきました。新しいステーク部長の選考に当たって地区代表に「私たちは新しいステーク部長としてどの兄弟がよりふさわしいのかを決定するものではありません。すでに主がお決めになっている人を探し出すのが私たちの責任なのです」と諭す幹部。病気になる家族の世話をするために任期途

中で帰ることになるかもしれないと悩み苦しむ姉妹宣教師に、幹部から与えられた「伝道を完了し、家族に

祝福をもたらす」という信じられないような祝福とその成就。幼い少年に祝福を授けるために人知れず日程を調整する幹部。罪の赦しを求めて告白する人々にキリストのような愛で接する幹部。みこころを求めてまるで目の前にいる友と話すように、主に語りかける幹部の祈り。通訳者として神の人のそばに仕えてきたからこそ味わうことのできる祝福の数々です。

新潟の地元に戻ると、そんな経験の一部を心ある兄弟姉妹たちと分かち合ってきました。幹部の訪問の少ない小さな地方部において信仰あつい兄弟姉妹は本当に謙遜な思いで耳を傾けてくださいます。通訳で全国に出かけるために、新潟に出席できないことも多い私にとって、ささやかなお返しと考えています。

ハワード・W・ハンター長老をお迎えした関東合同地区大会で通訳者として働いた余韻のまだ冷めやらぬ昨年10月、新潟地方部大会で、地方部長として働くよう召されました。24歳のときから10年間地方部長を務めていたことでもあり、なおかつ通訳で新潟を留守にする機会も多いことから、決して2度は来るまいと考えていた召しでした。それでも8年振りに召されたのは、まだやり残したことがあるのだし、またその後の経験を地方部の運営に生かすようにという主のみこころなのでしょう。ほぼ体力的にも物理的にも限界と思えるような仕事をしてきたつもりですが、それでも主が召されたのですから、さらに自分を整えて、心を尽くし体力を尽くして精一杯務めたいと心から願っています。

よく「通訳の仕事と地方部長の仕事ではどちらが疲れますか」という質問を受けます。私はそのたびに、「通訳の仕事は急性肺炎のようなもので、一時的には大変体力を使って疲れ果てますが、いずれ回復します。でも、地方部長の仕事は慢性の病気のようなもので、気づかぬまま段々と体力を消耗していきます」と答えています。最後の決定を数多く下さなければならない長の責任の重さを改めてひしひしと感じています。しかし、教会幹部や全国の兄弟姉妹との交わりは私にとって本当に大きな力です。できれば、通訳の責任と地方部長の責任のバランスを取りながら、全国の兄弟姉妹のお役に立ちつつ、新潟の兄弟姉妹にも祝福をもたらしたいものと願っています。

通訳の働きに感謝して下さる全国の兄弟姉妹に心から感謝します。また、至らぬ私を支持して下さる新潟地方部の兄弟姉妹に感謝します。そして何よりも、家族の励ましと支えに心から感謝しています。特に黙って支え続けてくれる妻に感謝しています。そして、「弱き者、単純なる者」(教義と聖約1:23参照)を使って、成長の機会を与えて下さる天父に感謝します。

幹部のそばに立つ数多くの経験から、私は教会幹部が確かに神に召された人であり、この教会が神のみ手によって導かれていることを証します。□

## 家族の証

### 私の改宗談

大阪堺ステーク部  
泉南支部

高木正彦



**確** か9年前の秋の初めごろ、土曜日の昼すぎにチャイムの音で表を見ると、ポツリポツリと降ってきた雨にぬれながら小柄な日本人と大柄な外人が玄関先に立っていました。ふたりは神様のことについて5分間ほど話してもよいですかと聞いてきました。不審なセールスマンにも見えず、雨にぬれても気の毒だと思い家に招き入れました。いくらか話をすると、妻が外出から帰って来、思わぬお客にびっくりしていました。ところが宣教師の話に興味を示したのは妻の方でした。私は今回を限りに宣教師には会うまいと思ったのですが、妻は次回の約束をしました。けれども何度も訪れないうちにふたりは転任してしまい、新しい外人の宣教師に代わりました。

宣教師たちの態度には、感動せずにはおられませんでした。丁寧な日本語、飾り気のない物腰、素直なまなざしが今でも忘れられません。ある時などはココアをカップの底にたまって残っていたものまで綺麗にスプーンですくって飲んでくれたのです。私たちの年代の人間は、茶わんの底にくっついた飯粒ひとつまできちんと食べるようにしつけられたものです。巖いわの乱れた昨今の風潮に失望しかけていた私の目の前で、19や20歳の、しかも豊かな国のアメリカの若者が、何恥じることもなく、さりとってやっけてのけたのです。

宣教師や教会員の方々にも何回かお会いするうちに皆素晴らしい人たちだということがわかってきましたが、それでも私が神様を信じる理由にはなりません。そのうちに妻は支部長の面接を受け、バプテスマを受けたいと言い出しました。「ちょっと待て、よく考えろ」と、止めましたが妻は話を進めてしまいました。強行に私が反対していたなら話は変わっていたでしょうが、憲法の番人である警察官の私が、たとえ家族といえども信教の自由を妨害するわけにはいきません。それにこの教会が素晴らしい教えを持ち、素晴らしい人たちから成っていることは、なぜか否定できなかったのです。

それから数日して、妻は今度は子供と一緒にバプテスマを受けさせると言い出しました。まだ自分で善悪の判断のつかない子供まではやめてくれと言いましたが、子供が自分で決めたと言っていると言うのです。

私という夫、また父親としての信頼度や存在感とはこの程度のものだったのかと、私は半ば、捨て鉢な気持ちになっていました。

このような私の気持ちを当時の支部長がご存じでしたら、妻たちのバプテスマはお許しにならなかったことでしょう。

支部長の家長の私に対する、妻たちのバプテスマの許可確認に対して、私は「彼女の意志に任せます」と答えました。このとき以来妻に対する心が冷めていき、ときどき、子供が一人前になったら妻と離婚しようとさえ考えるようになりました。

それでも日々の生活には何の支障もありませんでした。人間の気持ちとはおかしなもので、妻子が毎週聖餐会や教会の活動に集うのを安心して見ていました。それどころか、理由もなく聖餐会を欠席している娘には、どうして



教会へ行かないのだと、注意したぐらいです。

私以外の家族が教会員というのは決して嫌なものではありませんでした。ただ「宣教師を家に招待してもいい？」と持ちかけられるときには、また教会の話かという気持ちになり、一番つらい思いをしました。しかし妻が嫌な思いをするのがかわいそうになり、いつも宣教師の訪問を承諾してしまうのです。しかし、いったん彼らが家に来ると、私は歓迎して楽しい時を過ごすのが常でした。私はバプテスマこそ受けませんでした、たばこはきっぱりと断ちました。

このようにして8年間は過ぎていきました。その間、モルモン経や神様のことについて何も考えなかったわけではありません。ひとりひそかに祈ったこともあります。仕事の行き帰り、空を仰ぎながら、また近くの森の中で、「神よあなたは本当にいらっしゃるのですか」と。

神様からの答えは返ってきませんでした。当たり前のことです。信仰の「し」の字も知らない者が、しかも、祈りの原則も踏まえずに、祈るというよりは、自問自答に近いことをしていたのですから。

しばらくするうちに、家族や会員、宣教師も私のバプテスマをあきらめたのか、普通の付き合いだけで教会の話はしなくなりました。何という安らぎの日々だったでしょう。妻や子は聖い教会に集い、素直に成長してくれているし、私は宣教師と話すことで良心を問い詰められることもなくなり、のびのびと戒めを守らない日々を送ることができるようになったのです。というのも、私は宣教師から福音を教えられたとき、いくつかのモルモン経の聖句を読まされるたびに、声が詰まったり、震えたりして、読めなくなっていたからです。良心が責められていたのでしょう。そういう気持ちになるのが嫌で福音を学ぶのを避けていたのだと思います。

すべてが順調だと思っていた一昨年の秋ごろ、ついに再び本格的に教会の教えを学ぶ羽目になってしまいました。「宣教師が『あなたと友達になりたい』

と言っている。それに、『日本語があまり上手でないので、レッスンをうまくできるかどうか見てほしい』と電話をかけてきたけど嫌だったら断わってもいいのよ」と妻が言うのです。19や20歳の若造が、40歳を越えた私と「友達にだ」と、いい加減なことを。こう思いながらも、日本語の練習に協力してほしいと言われては無下に断わるのもかわいそうだと、とうとう引き受けてしまいました。

長老たちの本当の目的が私に福音を宣べ伝えることだとわかったときには本当に腹が立ちましたが、回を重ねるうちに、乗りかかった舟だと思い、とことん疑問点は聞いてやろう、という気になっていました。こう思ったのは、宣教師が何でも私の疑問に答え、能力が優れていたからではなく、むしろ「すみません、そのような質問を受けるとは思いませんでした。わからないので、次回までに勉強してきます。そういう疑問もあるのですね。かえって私の方が勉強になりました。ありがとう」という次第で、その素直さや謙遜さに打たれたからなのです。

私は再び9年前のように、ジョセフ・スミスの見神<sup>けんじん</sup>や神の存在の有無について、ひとり部屋で祈ったり、森や山に出かけて行って祈ったりするようになりました。けれども祈りの答えはなかなか受けませんでした。しばらくして祈りの答えを受けられない理由を教えてくれた宣教師の忠告に、私ははっとしました。「祈りの原則を守っていますか？」「知恵の言葉をちゃんと守っていますか？」「断食をしましたか？」知恵の言葉は会員が守るもの、と思っていた私は、たばこはやめていましたが、コーヒーなどは飲み続けていたからです。その日からは知恵の言葉に反するものは一切断って祈るようになりました。

そんなある日突然、私の祈りは答えられました。宣教師が私のために一生懸命に祈っていることが伝わってくるのです。心が熱くなり、涙がこみ上げてきます。私は自分の年齢も恥ずかしさも忘れて、妻や兄弟たちの前で、ただ「ありがとう、ありがとう」と言って大声で泣いていました。皆に感謝し

たい気持ちでいっぱいになっていたのです。これがみたまであつたことは、教会の勉強をしていくうちに後でわかりました。

そんな私でしたが、本当に神様がこの世にいらっしゃるのなら、黒人は教会で一定の役職に就けないという人種差別のようなことや、何も悪いこともしない子供が、交通事故や病気で死んでいくなど、ありえないはずだという気がして、心に引っかかっていました。そして次回宣教師に会ったらそれを問い正してみようと思っていました。やがてその日がやってきました。私の家を訪れた宣教師がこう切り出しました。「きょうは何を勉強したら良いか迷ったのですが、このビデオテープを見ようと思います。」そのビデオの中では、黒人の会員が教会で得た祝福や証を述べており、彼らのまばゆいばかりの顔が印象的でした。そればかりではありません。やがて、幼い我が子を亡くしてどうしようもない憤りを感じ、悲嘆に暮れた両親が登場しました。けれども彼らは福音に出会い、正しい権能を通して結び固められるなら、家族のきずなが永遠に続くことを、祈りの結果、確かに知りました。そして救いの計画を理解することにより、彼らの苦悩と怒りは、希望と喜びに取って替わったのです。

質問はもう何もありませんでした。神様は私の疑問を知っておられ、宣教師の懸命の祈りに答えてこのビデオを私に見せるように促されたのです。

これ以上何の迷いがあるでしょうか。私はバプテスマを決心しました。

心の狭い私は、私の止めるのも聞かずに教会に入った妻に対し、いつまでもこだわりが消えませんでした。あ のとき、私に従っていれば、この日はなかったかもしれません。8年もの長い間、私のために祈り、見守ってくれた妻や子供たちに感謝しています。今でも私はつまずきを感じるものがしばしばあります。そんなときは自分が受けてきた証に救いを感じ、励ましを受けています。証を持つことがいかに大切かがやっとわかりかけているところです。(たかぎ・まさひこ 支部日曜学校第二副会長)

# 夫の改宗

大阪堺ステーク部  
泉南支部

高木時子



9年前のクリスマスに、私はふたりの子供と一緒にバプテスマを受けました。その年の9月、宣教師の戸別訪問をきっかけに家族で福音を学んでいきました。けれどもそのときは、主人は神様の存在を信じる事ができないと言って、バプテスマは受けませんでした。私たちは弱くて小さな者ですが、教会員の皆様の愛と助けにより、これまで導かれてまいりました。

去年の9月23日、神殿訪問が企画されており、参入を希望していたので、前の安息日に推薦状の更新の面接を受けました。その日の聖餐会せいさんかいのことでした。パンの祝福を聞きながら静かに目を閉じていると、息子の宏彰ひろあきが白い衣装を着て主人にバプテスマを施している姿が見えるのです。しかも、次第にはっきりと見えてきたのです。私は「主人が活着いきているうちにバプテスマを受けるなら、こんな光景になるんだろうな」と、そのときふと思いました。面接の後で半ば冗談気味に、その光景のことを話しました。すると支部長はまじめな顔で「それは啓示ですね」とおっしゃったのです。

私はびっくりしました。啓示とか示現などというものは、本で読んだり話で聞いたりするものであって、まさか自分のした体験がそうだったなどとは思いませんでした。第一あの主人がバプテスマを受けるなんて、想像だにしたことがなかったのですから。とは言え、その日はまさかと思いながらも、「そうなればいいのですけどね」と言って話を終えました。

神殿から帰って2日目だったと思います。宣教師から電話があり「あなたのご主人とお友達になりたいのですが」と言うのです。「それでは主人の

いるとき直接電話をかけてください。」こう答えて電話を切りました。翌日宣教師から電話を受けた主人は、友達になるくらいなら別に構わないと、宣教師の訪問を承諾しました。

そのころ私は職業上、看護学校の講義を頼まれており、精神的にも時間的にも余裕はなく、宣教師が来てもお茶の用意をするだけで、一緒に話を聞く暇はありませんでした。

宣教師の訪問が2、3回続いたころ、主人は「何や、結局は教会の話やないか」と言い出して、宣教師の話は何回あるのかと尋ねました。私たち3人が教会員なので、無下に断わるのも悪いと思ひ、一通り聞くだけ聞いておしまいにしようという気持ちだったらしいのです。私は「そんなことに気を遣わなくていいから、嫌だったら断わってもいいのよ」と主人の気が安まるように言いました。しかしそうこうしているうちに1週間に2回くらいのペースで宣教師と会う約束を取っているようでした。

そのうちに支部の兄弟たちが宣教師たちと共に来てくれるようになりました。ある日曜日、兄弟のひとりが私を呼び「ご主人のバプテスマは近いですよ」と言うのです。私は日ごろの主人を知っているで、「そうでしょうか」と半信半疑で聞いていました。ある兄弟は息子にも「今度のお父さんは今までのお父さんとは違うよ」と言っていたそうです。

10月も末になり、私自身の仕事も一段落したので、初めて家庭集会に参加し、主人が福音を学ぶ姿に接して、驚いてしまいました。1カ月くらいで、こうも人が変わるものかと思うほどの変わりようでした。そこには神の存在を信じず、霊的な事柄を批判ばかりしていた主人の姿はなく、むしろ宣教師や兄弟の話をとても素直な気持ちで受け入れ、涙さえ流しているのです。あの兄弟の言葉は本当だった。聖餐の祈りのとき見たものは示現だった。こう思うと私も涙が止まりませんでした。「神様の業には時がある」とある兄弟がいつも話していましたが、本当に今が主人の改宗の時なのだと確信しました。バプテスマの日は家族が皆同じ日

になるようにクリスマスに予定し、夢にまで見たとおり、息子の宏彰からバプテスマを受けることになったのです。

この業が成就するために、宣教師や支部の兄弟たちが、神様と心をひとつにして、愛と奉仕の働きをしてくださいました。宣教師と共に主人を訪れてくれた人々、早めに来た宣教師と主人のために祈ってくれた近所のご家族、毎日主人のために祈ってくれたホームティーチャーのご家族。教会員の皆様の愛に心から感謝しています。

「お父さんがバプテスマを受けるかもしれないよ」と言われた息子の返事は「末の日は近いな」でした。息子は父親の改宗を末日のパロメーターにしていたのです。一方私は、我が家の建て替えの契約をすでに交わしているのでローンの返済が始まり、息子の大学受験と入学費用に大金が必要になうえに、主人が改宗して什分の一を、と思うと、正直なところ経済的にやっているかなという不安がよぎりました。「何ということをやっているんだ。神様の什分の一の大きな祝福を一番よく知っているのは私自身ではないか。」こう思い直した私は悔い改めました。それは私が改宗したときにも似たような経験があったからです。私は改宗以前、食糧危機が来ることを本で知り、災害に遭ったらいくら蓄えても無駄になってしまうと不安にかられながら缶詰などを蓄えていました。しかし教会を知り、食糧貯蔵が神様の戒めのひとつであると知らされたとき、神様は私たちが素直にその戒めを守り努力するならば、たとえ貯蔵物が燃えようと水に流されようと、それは神様のご意志であり必ず何かの救いがあるという証を持つことができたのです。この世的な事柄をいろいろと思ひ煩わづらうよりも神様の戒めを守り方がどれだけ大切かを思い直し、主人のバプテスマを心から喜び、感謝しました。

去年のクリスマスから私たち家族は4人そろって神様の道を少しずつ歩き始めて、目に見えない祝福をたくさんいただけてきました。1月にステーク部の神権会があり初めて主人が出席しました。それまでは私が家を留守にして様々な集会に参加していましたが、



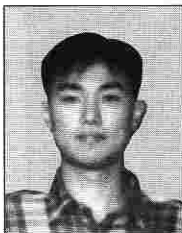
主人が神権者になって、逆の立場になりました。留守番をしながら「今主人が神様の集会に出席している」と思うと、涙があふれてとても平安で幸せな気持ちになりました。神様は留守番をしている家族にまでも祝福を与えてくださるのだとはっきり知りました。

現在主人はホームティーチャーに召されて、同僚の兄弟に導かれながら、夜勤明けで疲れていると思われるときも約束を取って出かけていきます。責任を果たして帰る主人の表情はすばらしく、霊が喜んでいるのがよくわかります。それを見て私たち家族も良い影響を受けて、自分の霊が高められるのを覚えます。安息日には霊的な番組しか見ではいけないと子供に注意するようになった主人。本当の意味での家庭の夕べも始まり、今、家族そろって福音の道を歩けるすばらしさを楽しみ感じ、心から感謝しています。福音は人として歩むべき真実の道であり、神様が生きて導いてくださっていることを心から証します。(たかぎ・ときこ 支部初等協会第二副会長)

## 伝道への決意

大阪堺ステーク  
泉南支部

高木宏彰



**私**は11歳の時に母と妹と共に宣教師の導きによりバプテスマを受け、末日聖徒イエス・キリスト教会に加入しました。父は独特の宗教観や哲学を持っていたようで、改宗には至りませんでした。教会に対しては好意的で、特に宣教師たちを気に入っていたようでした。

いつもほほえみをたたえ、素直でやさしい彼らは、当時まだ幼かった私の目にも好青年として映り、中学生になったころには、漠然とではありますが宣教師のようになりたい、伝道に出たい、という思いが私の心中に芽生え

ていました。毎週安息日に教会へ行き、宣教師に会うことが、私にとって非常な楽しみとなりました。少年期における私の信仰生活を支えてくれたのは、宣教師のすばらしい模範と青少年の助けと言っても過言ではありません。

そういうわけで、宣教師大好き人間である父を長とする我が家は、頻りに宣教師たちを食事に招待し、彼らと共に過ごす時間を多く持ちました。必然的に、彼らが私たち家族に与えた影響、特に霊的な影響は多大なものとなりました。このような機会を数多く持ち、彼らから様々な影響を受けたことが、後の父の改宗への大きな起因となったのではないかと私は考えています。事実、父は家庭の中では知恵の言葉を守り、教会員とあまり変わらない生活を送るようになっていったのです。

私は高校入学と同時に当時の支部長から伝道へ出る目標を立てるチャレンジを受けました。伝道へ出る決意は以前から持っていたものの、そのための準備や努力はお粗末なもので、ほとんど皆無といった状態でした。セミナーを受けてはいたのですが出席は悪く、聖典勉強もおろそかになっていました。それほど霊性の高くなかった私が、自分自身でもかなりの霊性の低下を感じて、危惧し始めたのはそのころでした。

このような好機を悪魔が逃すはずがありません。様々な誘惑が私を襲い、それに打ち負かされる時もありました。教会をたびたび休むようになり、以前より世俗的な考えを持ち始めました。

特に私の注意を引き傾倒させたものが軍隊、無神論、オカルトで、中でも軍隊へのあこがれは強く、実際、海外へ移住して軍に入隊しようと考えていました。友人とはよく宗教について議論する機会がありましたが、聖霊の導きや主に頼ろうとしない私は、神を否定する彼らにうまく反論できず、逆に彼らの意見にうならされることが多くありました。しかし、不思議と伝道へ出ようという意識は失わなかったのです。それは家族や多くの教会員の方の模範と証があったからです。彼らのおかげで、私は何とか信仰を保ち、伝道の志を失わずに済んだのです。そして高校3年生の時に必ず伝道へ出ることを主に約束したのです。

その後、地元の大学へ進んだ私は、遅ればせながら伝道の準備に取りかかりました。その年の夏、短期間ながら実際に宣教師と寝起きを共にして伝道に参加する機会に恵まれた私は、伝道のすばらしさを実感し、また特別な経験をすることができました。同僚になった日本人の長老との伝道を通して、

高木ご家族



福音を宣べ伝えることの大切さや証の力、そして伝道の楽しさを知ることができたのは非常に祝福でした。このようなすばらしい宣教師の方に会わせてくださった主に心から感謝しています。

宣教師になる年齢に達したふさわしい若者は伝道へ出るように言われていますが、私も可能な限り伝道に出た方が良いと思います。私に伝道への決意を固めさせてくれた印象的な箇所が、モルモン経の中にあります。それはモルモン書第1章16-17節です。「そこで私はこの国の民に神の道を伝えようとしたところ、私の口を塞がれて民に道を伝えることを止められた。なぜならば、民はすでにことさらに神にそむき、あの主に愛せられた弟子たちが民の罪悪のためにすでによそへ移されていたからである。私は民の中にのこっていたが、民の心がかたくなであるために、民に道を伝えることは止められていた。民の心がかたくなであるために、地はかれらに対してのろわれていた。」

神から心が離れた人がたくさんいる世の中であって、できるだけ数多くの人々に真実の福音と主イエス・キリスト様の愛と証を宣べ伝えることは急務であり、そして義務である、と思ったのです。

幸い私は伝道に出るに当たり、家族の反対もなく、逆に励ましと援助を受けられるので、彼らに心から感謝いたします。宣教師の中には、伝道へ出る際に困難な障害に遭ったり、家族から勘当されるのを覚悟で伝道に出たりする方が多くいます。彼らの尊い犠牲と模範、そして世界各地に出て行って、主の忠実な僕として働いているすべての宣教師に心から感謝いたします。私も彼らのように忠実な僕として働けるように、微力ながら尽力していこうと思っています。(たかぎ・ひろあき初等協会教師)

編注——高木ご家族は今年1月15日、東京神殿で家族の結び固めの儀式を受けた。宏影兄弟は今春、伝道を予定しており、現在申請中である。

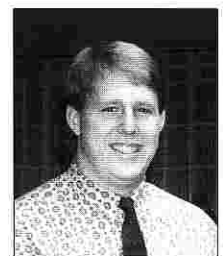
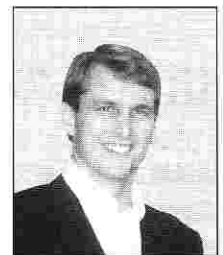
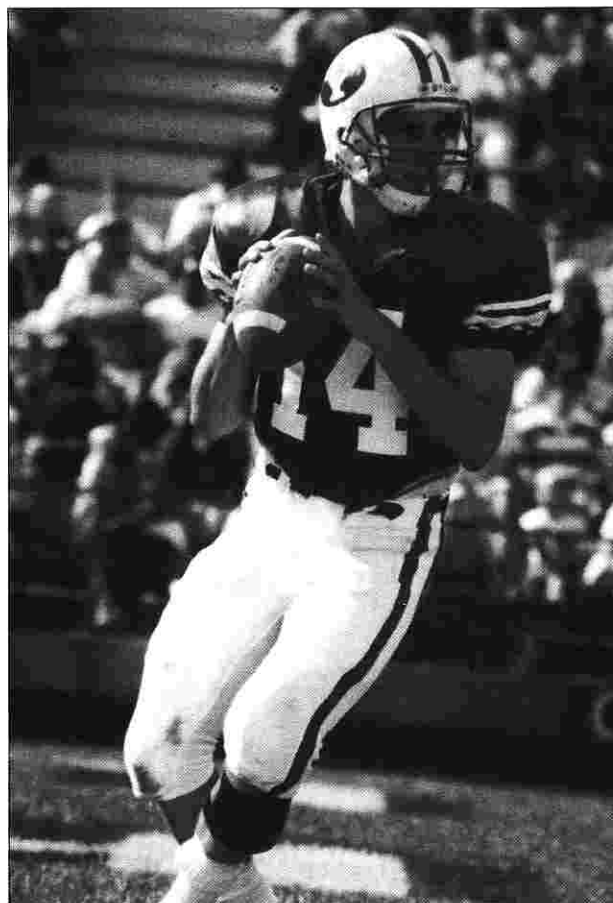
## 「ジャパンボウル」の出場選手、 ファイヤサイドで証する

去る1月10日、アジア北地域会長会第一副会長韓仁相長老の管理の下、ブリガム・ヤング大学のタイ・デトマー兄弟とブライアン・メイ兄弟を招いて、東京南伝道部主催のファイヤサイドが東京ステークスセンターで開催された。ふたりの来日は同月12日に東京ドームで行なわれたアメリカンフットボール全米学生選抜東西対抗戦「ジャパンボウル」に出場するため。

1991年1月に改宗したデトマー兄弟は前年、全米大学フットボールの年間最優秀選手に授与されるハイズマン賞に輝き、さらに全米大学体育協会(NCAA)の各種スポーツ選手の中からわずか6人しか選ばれない「トップ6

賞」も受賞した名クォーターバック。オフェンスガードのメイ兄弟は元神戸伝道部専任宣教師で、アリゾナ、ハワイ、ユタ、ユタ州立の各大学からスカウトされたこともある。

「才能や技量などは、人間が一生懸命努力したときにのみ与えられる神からの賜です。どれほど天与の才能にあふれた選手であっても、自分がなすべき努力を怠るならば、その才能を磨くときに与えられるはずのものだけでなく、現在持っているものまでも失ってしまうでしょう。」経歴や証をそれぞれの立場から述べたふたりの話にはこのような共通点があった。□



タイ・デトマー兄弟  
(左, 右上)  
ブライアン・メイ兄弟  
(右下)



# 天に宝を蓄える

岡山ステーク部倉敷ワード部

小野紀子

キリスト教に触れ、イエス・キリストについて深く知るようになったのは、半年間アメリカに滞在していた18歳のときでした。私を泊めてくれた家族はプロテスタントでとても信仰があつく、祈りの大切さや子供のしつけ、家族同士の豊かな愛情表現など、たくさんのことを自らの姿を通して教えてくれました。帰国を約1カ月後に控えたある日、滞在先の母親の癌が再発したと知らされました。けれども彼女は私にこう言いました。「私は死ぬのは怖くないのよ。イエス・キリストのみもとへ行くのだから」と。彼らのあつい希望で、私は復活祭の日にバプテスマを受けました。そして帰国して半年後、彼女が亡くなったという知らせを受けました。

それから2年ばかりが過ぎて20歳で結婚し、さらに2年たった冬のある日、勤めていたガソリンスタンドにひとりのアメリカ人が自転車のタイヤに空気を入れてほしいと言って来たのを見ました。彼に英語で話しかけたところ、英会話のちらしをくれました。私は早速英会話に行ってみることにしました。しかし雰囲気になじめなかったせいか、それ以後は行きませんでした。

それから2週間ほどして私が仕事をしていると、またあのアメリカ人の宣教師が手を振りながらスタンドへ入って来ました。「どうしたんですか。英会話に来ていないみたいですね。」彼が訪ねて来てくれたことに私はとても心を打たれ、また英会話へ行こうと思いました。次に英会話に行ったとき、初めてモルモン経を手に入れました。

何度か足を運ぶうちに、福音を学んでみないかと姉妹宣教師から勧められ、これもひとつの社会勉強だと思って聞くことにしました。

何回目かのときバプテスマについての話があり、バプテスマの儀式は罪を悔い改めた人に神権者によって施されると教えられて、涙が出てきました。

私は悔い改めも、神権もない、何の意味もないバプテスマを受けていたのです。「もう一度バプテスマを受けることはできますか。」私はずがる思いで尋ねました。「できますよ。」その言葉を聞いたとき、うれしきで心はいっぱいでした。1週間後、私は神権者の手によって真実のバプテスマを受けることができました。

私は旅行が大好きで、幼いころから添乗員になりたいと思っていました。改宗して1カ月、私は添乗員の求人広告を見て、どうしてもやってみたくなり、夫の協力を得てその仕事に就くことにしました。その仕事はいろいろな所へ行くことができ、たくさんの人々と出会えて、とても魅力ある仕事でした。でも何日も家を空けて旅行しなければならず、安息日を守ることはできませんでした。教会へ行く回数が減るにつれて私の中の霊的なものがだんだん薄らいでいくように感じました。

半年間国内の仕事をし、夢にまで見た海外旅行の添乗員の試験を高い費用を出して受けました。翌日、試験の結果の発表を待ちながら、私は家で「バプテスマを受けた後何をなすべきか」というパンフレットを読んでいました。

その中の「安息日」の項目を読んで私は驚きました。そこには「イエス・キリストの福音を守るためには、安息日を守るということがどうしても必要です」(p.8)と書かれていたからです。それまで私は安息日をあまり重要に思っていませんでした。「長年の夢だった海外旅行の添乗員の試験をやった受けたのだから、一度でもいいからやりたい。でも安息日も守る必要がある。」混乱した私は姉妹宣教師に電話をして、

相談することにしました。彼女はひと言こう言いました。「小野姉妹が本当にやりたいと思っていることを主の戒めのためにやめるならば、大きな祝福があるでしょう」と。

私ははっとしました。そしてすぐに長い間の夢だった海外旅行の添乗員という仕事をあきらめる決心をしたのです。

安息日に毎週教会に行くようになってからというもの、数えきれないほどの祝福と恵みを与えられてきたことに心から感謝しています。たくさんの友達ができ、責任を通して成長できました。証も雄々しく語れるようになり、友人がひとり改宗しました。何にも代えられない一番の祝福は、私より4カ月後に改宗した夫と神殿で夫婦の結び固めを受けられたことです。そのとき私のおなかの中には7カ月の子供もおり、共に結び固められたことに本当に感謝しています。今祝福師を通して与えられた祝福が一つ一つ成就しています。

この世の物よりも主を選び、「虫も食わず、さびもつか」ない(マタイ6:20)天に宝を蓄えるときに、主は私たちを大いに祝福し、永遠の生命への道を備えてくださることを証いたします。

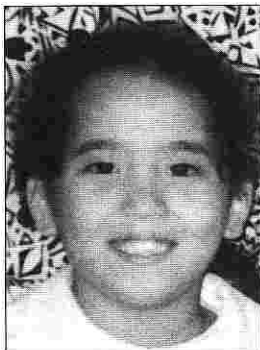
今、夫と娘の聖音と共に、いつも霊が和らぐ安息日に教会に集えることに感謝しています。(おの・のりこワード部初等協会の書記)



# みまもりに感しゃします

沖縄那覇ステーキ部  
那覇ワード部

与那嶺麻子



**わ** たしが病気になった時、ねつがあって頭がいたくて、とても大へんでした。その時しんけんしゃであるわたしのお父さんが、頭に手をおいでしゆくふくしてくれました。お父さんのいのりのことばをきいている時、とてもあんな気持ちになりました。すぐによくなるという強い気持ちをかんじました。しばらくすると本当によくなることができ、とても感しゃの気持ちでいっぱいになりました。しんけんしゃであるお父さんを通して、わたしたちはまもられていることを感しゃします。(よなみね・あさこ 勇者クラス)

# げんきになったお母さん

沖縄那覇ステーキ部  
那覇ワード部

糸数享子



**私** は、お母さんの体のちょうしがわるかった時に、おねえちゃんといっしょにおいのりをしました。つぎの日にはお母さんは、とてもげんきになったので、イエスさまとかみさまはお母さんをたすけてくれたんだな、と思いました。私は、よかったなと思いました。(いとかず・きょうこ 勇者クラス)

# かみさまの力

沖縄那覇ステーキ部  
那覇ワード部

武富良吾



**ぼ** くは、モルモン経がしん実のしょもつであることをあかしします。毎日モルモン経を読んでいて、ニーファイやベンジャミン王やアルマやたくさんの人々のあかしをよんでこのしょもつがほんとうにしんじつなものであることがわかりました。

また、ぼくはねつをだして10日ぐらい学校を休んだことがあります。びょういんに行ったけどなかなかねつが40どからさがりませんでした。お母さんはともしんばいして、お父さんとおじさんにいやしのぎしきをしてもらいました。すると、きぶんがよくなり、ねつもさがりました。まだかぜはなおっていないなかったので、ねていなければいけませんでしたが、でもかみさまの力をかんじました。(たけとみ・よしあ 勇者クラス)



# 「主は生けりと知る」

沖縄那覇ステーク部  
那覇ワード部

武富瑠香



**私**は、毎日モルモン経を読んでいきます。読んでいると、とてもいい気持ちになります。モルモン経の中には、人々のおいのりに対して、イエス・キリストが答えられているところ

がたくさんあります。また、人々がいましめを守るときにたくさん祝福されています。そのことを考える時、イエス・キリストへの証を強くすることができます。

また、私の家では、ねる前に必ずさんびかをききます。私はさんびかが大好きです。中でも、「主は生けりと知る」が大好きです。せいいいが私にイエスさまのことを証するため、このような気持ちになるのだと思います。

私は家庭の夕べで、福千年になったら、イエス・キリストといっしょに住むことができると習いました。

もっとイエス・キリストと親しくなりたいと思います。そうしたらもっと、イエス・キリストへの証が強くなると思います。私は、イエス・キリストが生きていることを証します。(たけとみ・るか 明るい少女クラス)

## 児童絵画展への 出展作品募集のお知らせ

**ユ**タ州ソルトレークシティの教会歴史美術博物館では、国際美術展への応募作品を募集します。応募対象者は全世界の末日聖徒の児童です。独創的で想像力豊かな作品をおよそ300点選び、本年10月9日から来年2月7日まで展示します。

今回の美術展の企画を担当する博物館教育補、ジェニファー・ルンド姉妹は次のように説明しています。「この美術展の目指すところは、子供たちに自分の家族にとって大切なものを、創造性を発揮して表現してもらうことです。一緒に働いたり、遊んだり、教会に行ったり、買い物に行ったり、家族ですることなら何でも構いません。題

材は、それこそ無限にあります。」

応募者は5歳から11歳までの児童に限ります。紙にクレヨン、鉛筆、水彩絵の具、木炭、油絵の具、コラージュ、そのほかの美術素材を用いて制作してください。応募点数はひとり1点とします。

作品の大きさは、28センチ×35.5センチ以内です。作品の裏面に、ステーク部名(地方部名)、ワード部名(支部名)、住所、氏名、年齢を明記してください。

応募作品は地元の配送センターか、教会歴史美術博物館に直接郵送してください。あて先は、次のとおりです。地元の配送センターに送る場合は7月

15日必着、教会歴史美術博物館に直接送る場合は8月7日必着です。

配送センターに送る場合——  
〒213 神奈川県川崎市高津区溝の口131  
末日聖徒イエス・キリスト教会  
配送センター 児童絵画展係  
教会歴史美術博物館に送る場合——  
The Church Museum of History and Art  
45 North West Temple Street  
Salt Lake City, Utah 84150  
U.S.A.

応募作品はすべて博物館の所有となり、返却されません。

展示作品の一部は「聖徒の道」、そのほかの教会出版物に掲載される予定です。□

# 1月に召された専任宣教師 第151期生12人



後列左から1-7, 前列左から8-12

(名前)	(出身地)	(伝道地)
1. 関根久	郡山D/郡山B	東京北伝道部
2. 山田敏光	北陸D/武生B	沖縄伝道部
3. 野村道生	盛岡D/盛岡B	東京北伝道部
4. 遠藤拓也	町田S/藤沢W	名古屋伝道部
5. 桃原保	沖縄那覇S/浦添B	札幌伝道部
6. 高鳥義照	名古屋西S/高畑W	札幌伝道部
7. 沢田富雄	東京東S/鎌ヶ谷W	大阪伝道部
8. 岩間一恵	大阪北S/花屋敷W	名古屋伝道部
9. 野口喜美代	札幌S/旭川第2W	沖縄伝道部
10. 金田伸子	熊本D/白川B	大阪伝道部
11. 比嘉涼子	沖縄那覇S/普天間W	仙台伝道部
12. 橋本由美子	神戸S/明石W	仙台伝道部

S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

## 役員の内命

1991年11月15日から1992年1月23日まで  
に管理本部会員統計記録課に通知の  
あった役員の内命(敬称略)

- 仙台伝道部青森地方部  
新地方部長: 森浩典  
(前任者: 小泉隆司)
- 東京北伝道部長野地方部  
新地方部長: 松橋春海  
(前任者: 関敏朗)
- 福岡ステーク部  
新ステーク部長: 山下和彦  
(前任者: 野間龍一)
- 大阪北ステーク部大津ワード部  
新監督: 坂口浩一  
(前任者: 中野正之)
- 神戸伝道部福知山地方部豊岡支部  
新支部長: 多田政広  
(前任者: 瀧沼史朗)
- 岡山ステーク部尾道支部  
新支部長: 矢原康次  
(前任者: 池田利章)
- 岡山伝道部松山地方部今治支部  
新支部長: 近藤啓司  
(前任者: 中原博)
- 岡山伝道部松山地方部宇和島支部  
新支部長: 末広盈詩  
(前任者: 川崎栄一)
- 岡山伝道部松山地方部新居浜支部  
新支部長: 藤谷四郎  
(前任者: 青葉太一)
- 福岡ステーク部八幡支部  
新支部長: 甲斐田修  
(前任者: 桜木裕二)

### 編集室から

## 皆さんの原稿を 募集しています

▶ ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など)、本

誌を読まれたの感想文などをお送りください。

▶ これまでローカルページでは証の著者の生年を記載しておりましたが、今後は記載しないことになりました。ただし編集作業の参考のため、投稿の際には従来どおり連絡先(電話番号)、教会での責任(役職名)に併せ、生年を記入してお送りください。

▶ お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶ あて先: 〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室

☎03(5489)9251



# 1月に召された専任宣教師

## 第151期生12人



後列左から1-7, 前列左から8-12

(名前)	(出身地)	(伝道地)
1. 関根久	郡山D/郡山B	東京北伝道部
2. 山田敏光	北陸D/武生B	沖縄伝道部
3. 野村道生	盛岡D/盛岡B	東京北伝道部
4. 遠藤拓也	町田S/藤沢W	名古屋伝道部
5. 桃原保	沖縄那覇S/浦添B	札幌伝道部
6. 高鳥義照	名古屋西S/高畑W	札幌伝道部
7. 沢田富雄	東京東S/鎌ヶ谷W	大阪伝道部
8. 岩間一恵	大阪北S/花屋敷W	名古屋伝道部
9. 野口喜美代	札幌S/旭川第2W	沖縄伝道部
10. 金田伸子	熊本D/白川B	大阪伝道部
11. 比嘉涼子	沖縄那覇S/普天間W	仙台伝道部
12. 橋本由美子	神戸S/明石W	仙台伝道部

S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

# 役員の内命

1991年11月15日から1992年1月23日まで管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の内命(敬称略)

- 仙台伝道部青森地方部  
新地方部長: 森浩典  
(前任者: 小泉隆司)
- 東京北伝道部長野地方部  
新地方部長: 松橋春海  
(前任者: 関敏朗)
- 福岡ステーク部  
新ステーク部長: 山下和彦  
(前任者: 野間龍一)
- 大阪北ステーク部大津ワード部  
新監督: 坂口浩一  
(前任者: 中野正之)
- 神戸伝道部福知山地方部豊岡支部  
新支部長: 多田政広  
(前任者: 瀧沼史朗)
- 岡山ステーク部尾道支部  
新支部長: 矢原康次  
(前任者: 池田利章)
- 岡山伝道部松山地方部今治支部  
新支部長: 近藤啓司  
(前任者: 中原博)
- 岡山伝道部松山地方部宇和島支部  
新支部長: 末広盈詩  
(前任者: 川崎栄一)
- 岡山伝道部松山地方部新居浜支部  
新支部長: 藤谷四郎  
(前任者: 青葉太一)
- 福岡ステーク部八幡支部  
新支部長: 甲斐田修  
(前任者: 桜木裕二)

### 編集室から

## 皆さんの原稿を募集しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など)、本

誌を読まれての感想文などをお送りください。

▶これまでローカルページでは証の著者の生年を記載しておりましたが、今後は記載しないことになりました。ただし編集作業の参考のため、投稿の際には従来どおり連絡先(電話番号)、教会での責任(役職名)に併せ、生年を記入してお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただきますことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶あて先: 〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室  
☎03(5489)9251